㈶広島市文化財団発掘調査報告書　第14集

段之原山遺跡

－広島市安芸区上瀬野町所在－

2006

財団法人広島市文化財団

はしがき

近年、一般国道２号の交通渋滞の解消を目的として、東広島市と広島市を結ぶ東広島・安芸バイパス建設工事が計画され、その道路整備工事にともなって発掘調査件数も増え、瀬野川流域沿いの古代のようすが明らかになりつつあります。

この工事に伴いこのたび発掘調査をおこなった安芸区段之原山遺跡では、瀬野川流域中野地区の成岡Ａ地点・Ｂ地点遺跡、三谷遺跡や、上瀬野地区の塔之原遺跡に続き、弥生時代後期におけるこの地域の集落での生活や社会を考察する上で貴重な資料を得ることができました。

この報告書が、一人でも多くの市民の方に活用され、広島の歴史を理解する上で役立つことができれば幸いです。

最後になりましたが、この調査にあたって、ご指導、ご助言をいただきました諸先生方、ご協力いただきました関係機関・関係者の方々ならびに調査に従事していただいた方々に厚く御礼申し上げます。

平成１８（2006）年３月

財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課

例　　言

1．本書は、広島市安芸区上瀬野町字段之原山地内における、一般国道２号（安芸バイパス）建設工事に伴い、平成 16 年度に実施した段之原山遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、国土交通省中国地方整備局広島国道事務所から委託を受け、財団法人広島市文化財団が実施した。

3．本書の執筆は、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳを若島一則・松原啓・小林奈緒美が分担して行い、小林奈緒美が編集した。

4．遺構の実測および写真撮影は、若島・松原・小林・野田希和子が実施した。遺物の実測、写真撮影および図面の製図は松原・小林・野田が実施した。

5．本書に掲載した航空写真の撮影はスタジオ・ユニに委託した。

6．基準点測量は、復建調査設計株式会社に委託した。なお、第２図における基準杭１と基準杭２のデータは以下のとおりである。（座標値は世界測地系である）
基準杭１　X＝－ 175396.467　Y＝ 41988.564　　基準杭２　X＝－ 175433.013　Y＝ 42004.824、基準杭１から基準杭２への方向角は 156°00′50.01″ である。

7．本書に掲載した挿図の方位はすべて座標北である。

8．水平基準は海抜高であり、T．P．（東京湾平均海面標高）による。

9．第１図は国土交通省国土地理院発行の 50,000 分の１の地形図（海田）を複製して使用した。

10．本書に使用した遺構の略記号は下記のとおりである。
SH：住居跡　　SK：土坑　　SX：テラス状遺構　　ST：土壙墓

11．土層断面図及び土器の色調は、日本色研事業株式会社『新版標準土色帖（21 版）』（1998 年）によった。

12．本発掘調査の調査記録及び出土遺物は広島市教育委員会からの委託をうけて、財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課において保管・活用している。

目　　次

Ⅰ　はじめに…… 5
Ⅱ　位置と環境…… 7
Ⅲ　遺構と遺物…… 12
Ⅳ　まとめ…… 40

図　版　目　次

第１図　段之原山遺跡の位置と周辺遺跡分布図…… 9
第２図　段之原山遺跡遺構配置図…… 13
第３図　SH1・SK1 実測図…… 14
第４図　SH2・SK2 実測図…… 17
第５図　SH3・SK3・SK4・SK5 実測図 …… 19
第６図　SH4 実測図 …… 22
第７図　SX1 実測図 …… 23
第８図　SX2・ST1・ST2・ST3 実測図 …… 25
第９図　ST1実測図 …… 29
第10図　ST2実測図 …… 29
第11図　ST3実測図 …… 29
第12図　SX3実測図 …… 30
第13図　SK6実測図 …… 30
第14～17図　出土遺物実測図 …… 33

付　表　目　次

出土遺物観察表…… 37

図　版　目　次

図版 1a　段之原山遺跡遠景（航空写真・調査前・西から）
　　b　段之原山遺跡遠景（航空写真・調査後・西から）
図版 2a　段之原山遺跡遠景（航空写真・調査前・北から）
　　b　段之原山遺跡遠景（航空写真・調査後・北から）
図版 3a　SH1・SK1（北から）
　　b　SH1b 土器出土状況

図版 4a　SH2・SK2（北から）
　　b　SH3（西から）
図版 5a　SK3・4・5（西から）
　　b　SH4（北から）
図版 6a　SX1（南東から）
　　b　SX2（東から）
図版 7a　SX2 土器 19・20 出土状況（西から）
　　b　ST1・2・3（北から）
図版 8a　SX3（南から）
　　b　SK6（東から）
図版　9　出土遺物（1）
図版 10　出土遺物（2）
図版 11　出土遺物（3）
図版 12　出土遺物（4）

Ⅰ　はじめに

広島市教育委員会（以下「市教委」）は平成９年３月31日に建設省中国地方建設局広島国道工事事務所（現在の国土交通省中国地方整備局広島国道事務所。以下「広島国道」）から、一般国道２号（東広島バイパス・安芸バイパス）建設事業地内における埋蔵文化財の有無並びに取扱いについて照会を受けた。市教委はこれを受けて、事業地内における現地踏査及び試掘調査を実施した結果、安芸区上瀬野町（字段之原山353外）において、弥生時代の住居跡等（段之原山遺跡）を確認し、その旨を平成15年10月16日に広島国道に回答した。以後、この遺跡の取扱いについて両者は協議を重ねたが、計画変更による遺跡の現状保存は困難との結論に達し、発掘調査を実施し記録保存の措置を講じることとなった。

そこで広島国道は平成16年２月27日に財団法人広島市文化財団（以下「文化財団」）に対して、段之原山遺跡を対象とした発掘調査の実施を依頼した。これを受けて文化財団文化科学部文化財課（以下「文化財課」）では、現地調査を同年６月から12月にかけて、報告書の作成を同年12月から平成17年３月にかけてそれぞれ実施した。

発掘調査の関係者は、下記のとおりである。

調査委託者　　国土交通省中国地方整備局広島国道事務所
調 査 主 体　　財団法人広島市文化財団
調査担当課　　財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課
調査関係者　　吉 中 康 麿　理事長
　　東 山 章 次　常務理事
　　沼田眞之輔　文化科学部長
　　幸 田　　淳　文化財課長
　　波 田 秀 穂　文化財課主任
調査担当者　　若 島 一 則　文化財課主任指導主事
　　松 原　　啓　文化財課指導主事
　　小林奈緒美　文化財課学芸員
調査補助員（50音順）
（発掘調査）　奥田哲也　小倉武　加藤恒子　河野幸子　倉本勝太郎　倉本登志子　河野勝
　　貞藤静磨　澤岡忠重　炭谷政夫　中村茂　中村照夫　中村春男　庭尾勝美
　　野田希和子　日浦文子　平田法男　檜和田正登　宮地美穂　森田美智子
　　山本隆教　吉井清　和田実千代
（整理作業）　稲坂路子　酒本由理郁　菅原彰子　住川香代子　野田希和子　橋本礼子

なお発掘調査を進めるにあたっては、国土交通省中国地方整備局広島国道事務所、広島市教育委員会生涯学習課文化財担当、瀬野公民館の職員の方々、並びに月退光政氏や地元町内会をはじめ多くの方々に多大なご配慮とご協力をいただいた。さらに調査の過程や報告書の作成に際しては、当財団の埋蔵文化財発掘調査指導委員会委員である広島大学名誉教授潮見浩先生、同川越哲志先生、

同河瀬正利先生及び広島大学大学院教授古瀬清秀先生から貴重なご助言、ご指導をいただいた。ここに記して感謝の意を表したい。

Ⅱ　位置と環境

1．自然的・地理的環境

段之原山遺跡は、広島市安芸区上瀬野町字段之原山外に所在する。

本遺跡は、広島湾の北東、広島市安芸区旧瀬野川町域に位置する。旧町域の大部分は山地に囲まれ、町の中央を瀬野川が北東から南西へほぼ直線的に貫流し、安芸郡海田町を経て広島湾（海田湾）に注いでいる。現在の集落及び耕地はこの瀬野川沿いの、特に小河川との合流域を中心に営まれている。即ち、熊野川が合流する上瀬野地区、榎ノ山川が合流する下瀬野地区、畑賀川が合流する中野地区及び畑賀川中下流域の畑賀地区の 4 地区に大別することができる[注1]。

今回調査した段之原山遺跡は、上瀬野地区の平野を望む丘陵上にある。上瀬野地区は、瀬野川が東広島市八本松町の賀茂台地から流れを発し、狭小な谷地形を下った山地からの出口に位置し、本地区を境に下流域では流れは緩やかとなり僅かではあるが河川の氾濫を避けることのできる可耕地を見出すことができる。また、一方で瀬野川流域は、古くは古代山陽道が通り、広島湾岸から東広島市さらには遠く岡山や近畿とを結び、多くの人々に利用されてきた[注2]。上瀬野地区は、瀬野川流域において貴重な可耕地に恵まれた平野としての重要性に加え、交通の要衝としても、利便性の高い地域であったと考えられる。

遺跡の位置は旧町域南部に位置する鉾取山から北東に派生した尾根を下り、300 m付近のピークからさらに北に派生した小尾根の先端部よりやや上った地点で、ほぼ北側に斜面を向ける。標高約 130 m、付近の水田面との比高差約 50 mを測る。

2．歴史的環境

旧瀬野川町域の弥生時代から古墳時代にかけての遺跡の分布を見ていくと、地域的には先述した上瀬野、下瀬野、中野、畑賀の 4 つの地区にほぼ分かれて位置している。

まず、4 地区の中では最も広い平野を有し数多くの遺跡が確認されている中野地区では、発掘調査によりその内容が明らかになっているものとして、天狗坊山北西の尾根筋中腹に位置し、弥生時代中期終末から後期後半にかけての、比較的長期間にわたって営まれた大規模集落である三谷遺跡[注3]があり、住居跡 24 軒などの集落跡が確認された。本遺跡からは直径 10 mを超える広島市最大級の大型住居や 50 点を超える大量の鉄器も出土している。また中野地区の平野を一望できる丘陵上には弥生時代後期から古墳時代初頭の住居跡 3 軒などの集落跡を確認した成岡 A 地点遺跡[注4]がある。同じ丘陵上の南側上方には、弥生時代中期後半から古墳時代初頭にかけて築かれた 17 基の土壙墓を中心とした集団墓地（墳墓群）が確認された成岡 B 地点遺跡[注5]があり、付近にはこれらを築いた大きな集団の存在が想像される。その他調査によるもの以外のものとして、丘陵端部の尾根上から弥生時代中期後半頃と位置づけられる高坏が出土したとされる井原遺跡[注6]、同じく丘陵端部に位置し弥生時代後期中ごろとされる山王貝塚[注7]、弥生時代後半頃と考えられる川原地貝塚[注8]などがある。ほかに古墳時代に入ってからの遺跡としては、前述した成岡 A 地点からは箱式石棺

を主体部にもつ第２号古墳をはじめ古墳時代初頭に築かれた３基の古墳が確認され、畑賀川河口を望む丘陵上に竪穴式石室を主体部とし畿内的要素をもつ上安井古墳[注9]が造られている。また、蓮華寺山の南に伸びる尾根上先端部には、箱式石棺と推定される埋葬施設を主体部にもつ円墳などからなる大師堂裏山古墳群[注10]、その西方には大師堂古墳[注11]が存在する。

畑賀地区には、畑賀川とその支流水谷川、為角川が合流する比較的広い沖積地に臨む丘陵上に位置し、弥生時代後期から古墳時代前期の土器及び、古墳の石棺内部から内行花文鏡が出土したとされる中須賀神社境内遺跡[注12]がある。また現在は消滅し確認は難しいが、水谷川の両岸には水谷貝塚[注13]が存在していたようである。

下瀬野地区では、山王貝塚と同種の貝類が認められ弥生時代後期中頃形成されたと考えられる一井木貝塚[注14]や弥生集落跡とされる桑原東遺跡[注15]がそれぞれ瀬野川沿いの可耕地を望む丘陵上に立地している。本地区においては現在のところ古墳は確認されていない。

最後に、段之原山遺跡の位置する上瀬野地区であるが、本遺跡のほかに、すぐ西の河岸段丘上に弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての短期間に住居跡 17 軒、墓坑 15 基などからなる比較的大規模な集落跡が営まれた塔之原遺跡[注16]が確認された。同時期に近接して集落が営まれていることから、本遺跡との関連性が注目される。また、水ヶ丸山から北西に派生した上瀬野地区を一望できる尾根上に、これら２つの遺跡の成立より相当期間をおかない古墳時代前半頃までには築造されたと考えられる、箱式石棺を主体部にもつ坊山古墳群[注17]がある。

以上、旧瀬野川町域を中心に弥生時代から古墳時代にかけての集落に関わる遺跡を中心に概観した。総じて瀬野川、畑賀川により形成された可耕地を基盤にして、河川の氾濫を避けるためか低丘陵上を中心に成立し、時期的には弥生時代後期から古墳時代初頭まで存続したと考えられる。その立地は現在、河岸の直近まで開発が進んだ状況を除けば、ほぼ今日のこの地域における集落及び耕地など農業基盤の分布と酷似している状況が伺われる。しかし、発掘調査例も少なく、この時期における集落の立地の状況、成立した要因、存続期間及びその後の地域の発展過程など明らかになっていない点も多い。まさに弥生時代後期以降の瀬野川流域の社会的状況を解明する上で、発掘調査による貴重なデータの蓄積が待たれていたのである。

注）

(1)　広島市役所編『瀬野川町史』　1980 年

(2)　財団法人広島市歴史科学教育事業団編　『古路・古道調査報告』広島市教育委員会　1992 年

(3)　財団法人広島市文化財団『三谷遺跡』　2006 年

(4)　財団法人広島市文化財団『成岡 A 地点遺跡』　2001 年

(5)　財団法人広島市文化財団『成岡 B 地点遺跡』　2001 年

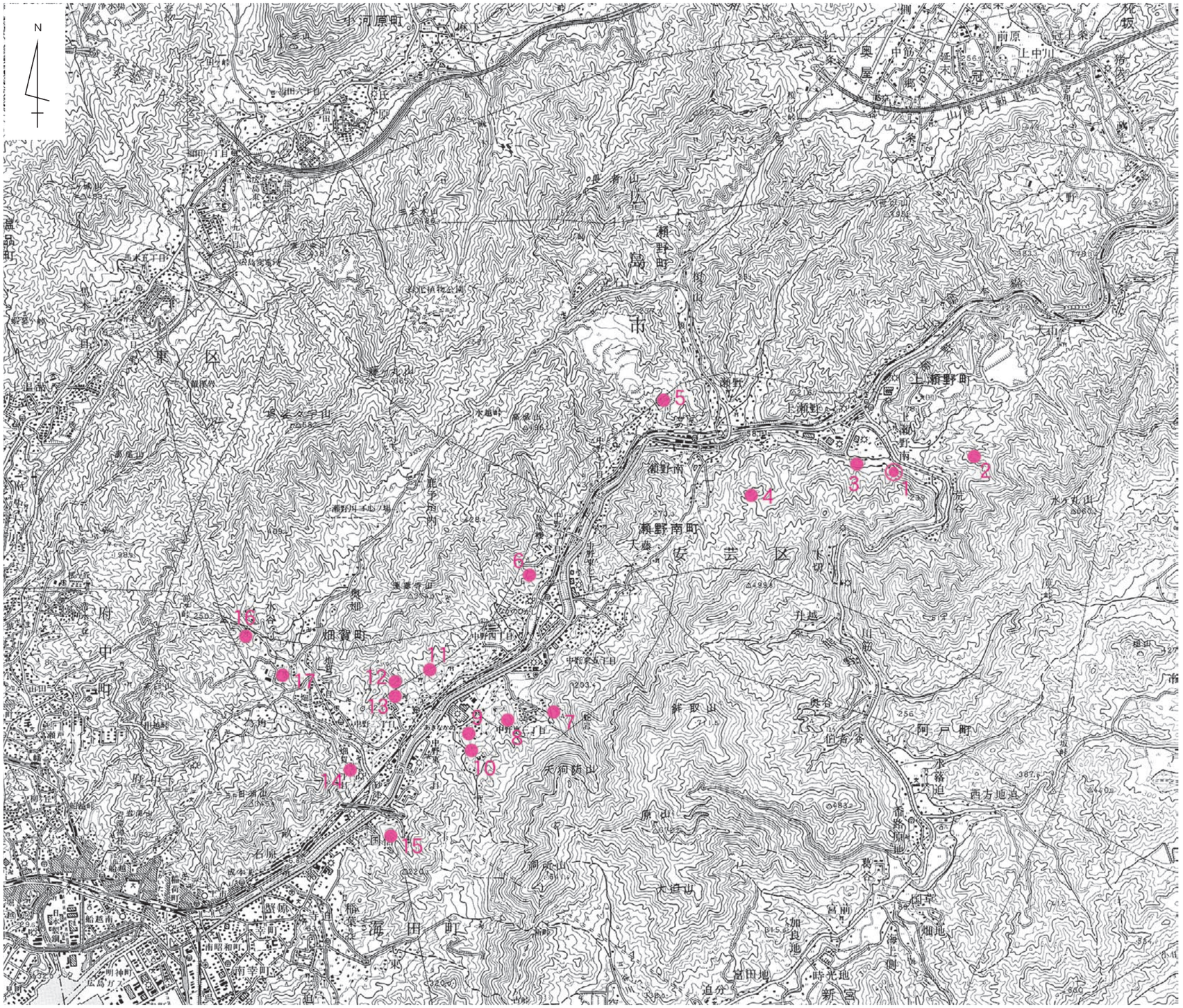
(6)　1 に同じ

(7)　1 に同じ

(8)　1 に同じ

(9)　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『上安井古墳発掘調査報告書』2001 年

(10)　1 に同じ



第１図　段之原山遺跡の位置と周辺遺跡分布図（S=1:50,000）

（上瀬野地区）
1　段之原山遺跡
2　坊山古墳群
3　塔之原遺跡

（下瀬野地区）
4　一井木貝塚
5　桑原東遺跡

（中野地区）
6　井原遺跡
7　三谷遺跡
8　山王貝塚
9　成岡A地点遺跡
10　成岡B地点遺跡
11　川原地貝塚
12　大師堂裏山古墳群
13　大師堂裏古墳
14　こもり塚古墳群
15　上安井古墳

（畑賀地区）
16　水谷貝塚
17　中須賀神社境内遺跡

(11)　1 に同じ

(12)　1 に同じ

(13)　1 に同じ

(14)　1 に同じ

(15)　1 に同じ

(16)　平成 15 年度に財団法人広島県教育事業団埋蔵文化財調査室が発掘調査を実施した。報告書が未刊行であるため詳細は明らかではない。

(17)　1 に同じ

Ⅲ　遺構と遺物

1．調査の概要

本遺跡は、鉾取山の山頂部（標高 711.5m）から北東に派生した尾根上約 3.7km に位置するピーク（239m）からさらに北に派生した尾根筋の中腹に立地しており、調査区の南端で標高約 138m、北端で同じく約 120m を測る。調査範囲は尾根上の森林地で、勾配は遺跡の範囲で幾分緩やかになるもののかなりの急傾斜であること、尾根上を里道が通っていることなどから、遺構が雨水などで流出していることが予想された。

広島市教育委員会の事前の試掘調査により尾根上平坦面より竪穴住居跡及び弥生土器片が確認されていたことから、尾根上に築かれた弥生時代の集落跡を想定し、この尾根筋を中心に遺構の掘り下げを行った。

調査の結果、尾根の中軸線上及びその両側の斜面を削平して、竪穴住居跡 4 軒（SH1 ～ SH4）、テラス状遺構 3 か所（SX1 ～ SX3）、墳墓 3 基（ST1 ～ ST3）、土坑 6 基（SK1 ～ SK6）をそれぞれ確認した。遺物は弥生土器、鉄器等が出土した。

2. 遺構

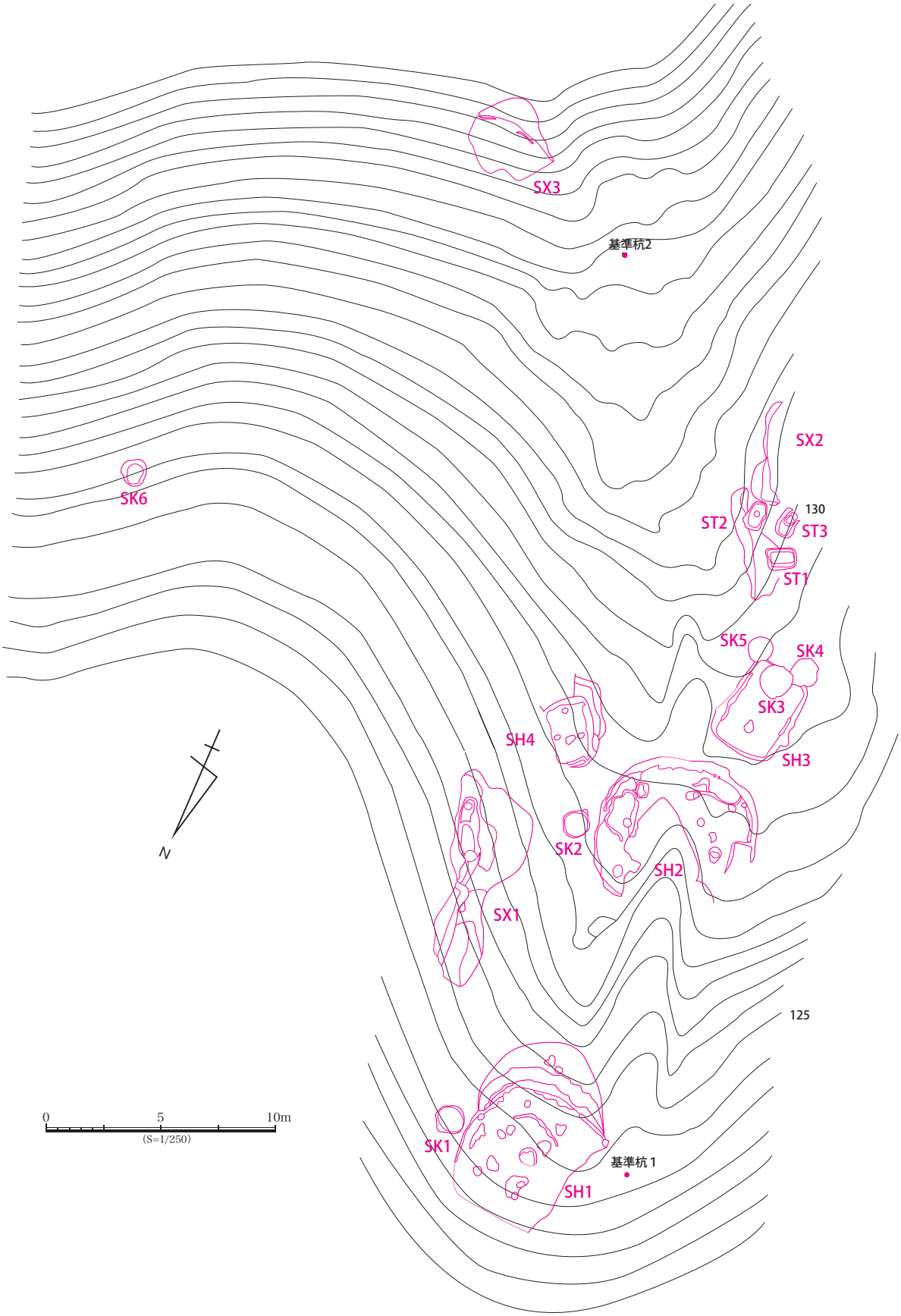
○ SH1・SK1（第 3 図）

本遺跡の北端に位置する住居跡で、標高 123.7m 付近に位置し、最も低い場所に建てられている。西側の約 1/5 は、里道造成のため削られ、北側の約 1/5 は流出している。南側は住居を作り出すために、南北方向に 240cm、東西方向に 6m にわたり、斜面を削り込んでいる。これによって、形成された幅 50 ～ 60cm の平坦部が、残存している南および東側の壁の一部に沿うように付属している。この平坦部は壁の高さを均一に保つために造られたものと考えられる。住居の壁は南・東側にのこり、現存する壁高の最高は南側で約 55cm である。壁溝は南～東南に主に残り、幅 13 ～ 19cm、深さ 6 ～ 10cm である。北側にも一部検出され幅は約 5cm、深さ約 8cm である。

残存する南と東側の壁を観察すると、それぞれ中央部分が若干膨らむが、ほぼ直線を成しており、この住居跡プランは隅丸方形の竪穴住居であると推定される。規模については前述した北側に残る壁溝を本住居の北限と考えるならば、一辺 552cm 程度で、床面の最高所の標高は 123.79m である。

床面からは P1 ～ P9 のピットを確認した。この中で壁との位置関係から P1 ～ P5 が主柱穴と考えられる。P1 は底面形状が長径 26cm、短径 18cm の長円形で、残存する深さが約 78cm である。P2 は底面形状が直径 20cm の円形で、残存する深さが 46cm である。P3 は底面形状が直径 19cm の円形で、残存する深さが 70cm である。P4 は底面形状が直径 18cm の円形で、残存する深さ 30cm である。P5 は底面形状が直径 12cm の円形で、残存する深さ 69cm である。

これら 5 本の柱穴が隣り合う間隔は、P1 － P2 間で 190cm、P2 － P3 間で 176cm、P3 － P4 間で 184cm、P1 － P5 間で 194cm である。これらは P1 － P2 － P3 と P4、P5 が、それぞれ直角に並んでおり、その配置状況から見て、里道によって削られている部分に P1 ～ P3 に対応する



第 2 図　段之原山遺跡遺構配置図

第 3 図　SH1・SK1　実測図

柱穴があったことが想定される。

ただ、P2、P4 は P1、P3、P5 に比べると、明らかに浅くなっており、P5 については直径が 12cm と他の柱穴に比べて小さく柱穴間も若干不揃いなことから、P2、P4、P5 を副柱穴と考え、P1、P3 を主柱の 2 本とする、4 本柱の住居を想定すると、この住居は方形 4 本の主柱穴をもち、その中間に副柱穴を持つ 8 本柱の住居であると考えられる。

住居中央部から、直径 76cm、深さ 8cm のほぼ円形の掘り込みを確認した。試掘の結果から、炭や焼土を多く含んでいること、また調査時の土層観察で炭を多く含み、掘り込み内およびその周囲に焼土が分布していることから炉跡と考えられる。

また、柱穴の配置ということなら、P6 － P7 － P8 － P9 の組み合わせも考えられよう。P6 は底面形状が長径 27cm、短径 20cm の長円形で、残存する深さ 26cm である。P7 は底面形状が直径 10cm の円形で、残存する深さが 24cm である。P8 は底面形状が長径 30cm、短径 24cm の長円形で、残存する深さが 72cm である。P9 は底面形状が直径 8cm の円形で、残存する深さが 42cm である。これらの 4 本が隣り合う柱穴の関係は P6 － P7 間で 168cm、P7 － P8 間で 172cm、P6 － P9 で 172cm、P8 － P9 間で 186cm である。

これら 4 本については、深さ、大きさ共に不揃いであり、疑問は残るが、配置と並びはほぼ直角に並んでおり、現存する住居跡の前に存在した小規模な住居の主柱穴という可能性も考えられよう。

また、住居床面の南側と東側の一部に壁溝の痕跡と考えられる溝を検出した。南側の溝は、幅 15 ～ 21cm、深さ 6 ～ 19cm、東側の溝は、幅 13 ～ 20cm、深さ約 9cm である。これらについても、小規模な住居跡の痕跡という考え方もできようが、前述した P6 ～ P9 を 4 本柱とするには柱穴と溝との距離が近接しており、別の住居となると考えられる。

この場合、この溝に伴う住居等は想定しえないことになり、この溝を壁溝とする住居の存在自体に、大いに疑問が残ることになるのである。いずれにせよ、1 回もしくは 2 回の建て替えの可能性がある。

本住居に伴う遺物として、弥生土器 (2)(3) がある。また住居跡の壁面に近接して弥生土器 (1) が出土しており、その出土状態から、本住居の廃棄後、時を経ずして埋まったものと判断される。このほか、埋土中から鉈 (32) が出土している。これらの土器の時期はいずれもⅡ－３期（若島 2003）に属しており、少なくともこの時期まで住居が使用されていたと考えられる。

また、この住居の約 16cm 東側に SK1 が位置している。底面は長径 124cm、短径 100cm の長円形で、深さ約 116cm、底面標高は 122.7m、壁がほぼ垂直に立ち上がる円筒形の土坑である。土坑の用途は貯蔵穴と考えられる。SK1 からは弥生土器（4）が出土した。時期はⅡ－２－③期に属すると考えられる。SK1 と SH1 の時期的な関係は土層のきりあい関係も見られないため明確にしがたい。

○ SH2・SK2（第 4 図）

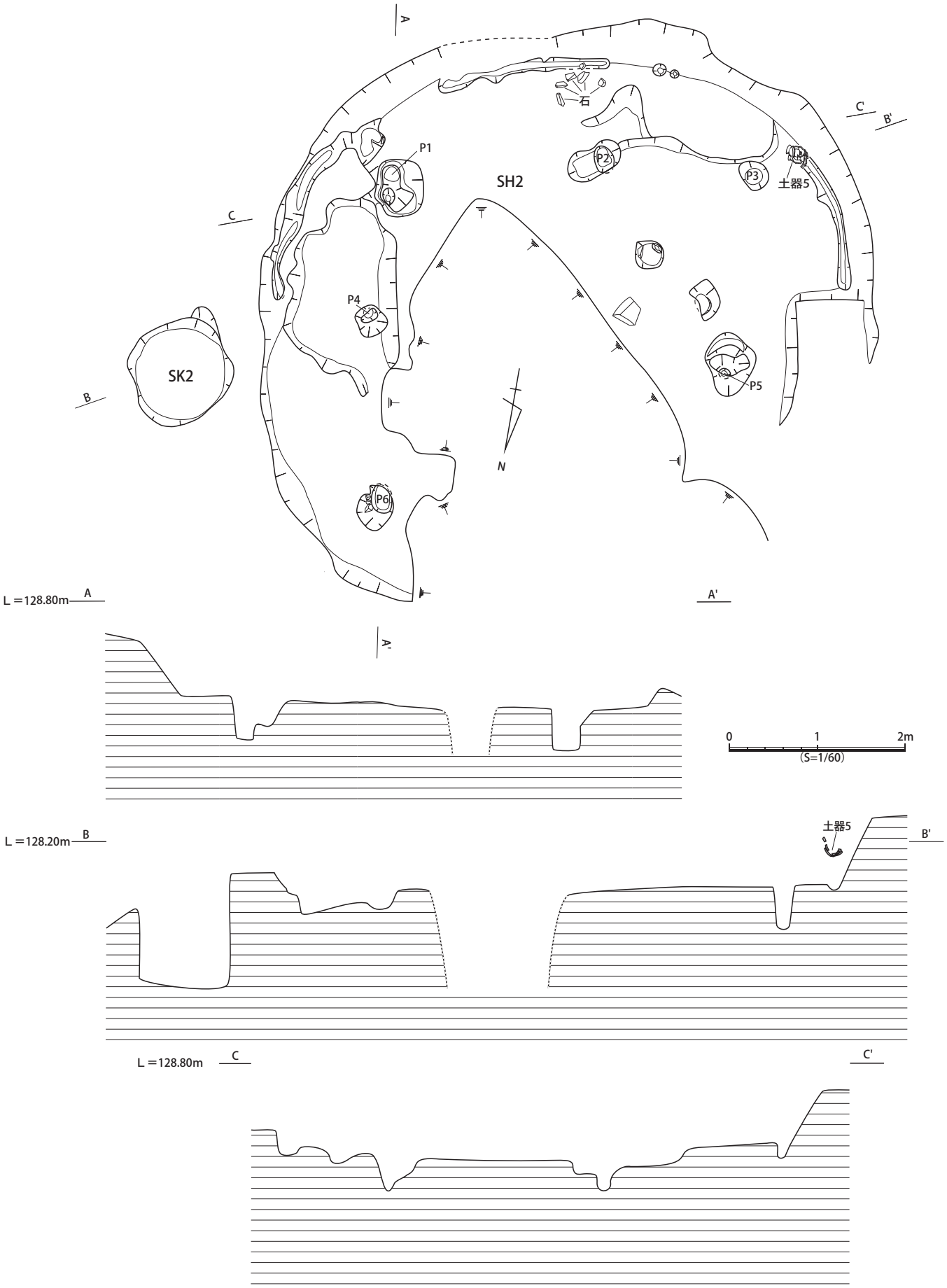
SH2 は、SH1 の南約 7m、遺跡の所在する尾根のほぼ中軸線上から検出された住居跡である。壁は、南、東及び西側の一部で遺存しており、壁高は南側で最高となり、81.9cm を測る。壁溝は南、東、西側でそれぞれ断続的に遺存しており、幅は 10 ～ 15cm、深さは 2 ～ 15cm である。床面は北側及び東側の北半分が斜面により流出し、また床面中央部の北半分が里道により大きく削られ、陥没している。住居跡のプランは、壁及び床面の残存状況から隅丸方形と考えられ、その場合、東西方向で一辺 620cm 程度である。床面の最高所は標高 127.70m を測る。

床面からは、壁との位置関係から、主柱穴と考えられる P1 ～ P6 の 6 個のピットを確認した。その配置は P1 － P4 － P6、P1 － P2 － P3 及び P3 － P5 は、住居跡のプランに沿ってそれぞれ直角に並んでいる。しかし、柱穴の間隔をみると P1 － P2 間で 250cm、P2 － P3 間で 155cm、P1 － P4 間で 170cm、P4 － P6 間で 235cm、P3 － P5 間で 230cm とばらつきが見られ不自然である。そのため P2、P4、P5 を副柱穴として改めて見直すと、P1 － P6 間、及び P1 － P3 間は、それぞれほぼ 390cm と等間隔であり、P1、P3、P6 が主柱穴と判断される。この場合 4 本柱の住居を想定し得るが、もう 1 本の主柱穴が存在すべき位置が里道で削られており、確認できないのが現状である。

また、東、南、西側の壁に沿った 3 ヵ所でそれぞれ床面上に整地した高まりを確認した。東側整地面は、西側が大きく陥没し北端部分でほとんど残存部を観察できないため、形状の想定は困難であるが、現状では、南端部分で最大幅約 50cm、長さ最大 150cm、高さ約 10cm である。南側整地面は、遺存部分からその形状は長さ約 150cm、幅約 80cm の長方形が想定され、高さ約 20cm である。西側整地面は北側が斜面により流出しているため長さは不明であるが、遺存部分からその形状は長さ 120cm 以上、幅約 80cm の長方形が想定され、高さ約 10cm である。これらの高まりは見方によっては、内部に造られた住居跡の痕跡という考え方もできるが、土層観察から立ち上がり部分は観察されず埋土は一体となっていたことから、同時期に埋まったものである。また、それぞれの整地面は、各壁面の柱穴列外側のほぼ主柱穴から副柱穴までの範囲に築かれており、位置的な規則性も見出され、加えて北側及び西側整地面は、壁溝も整地面部分は途切れている。これらのことからも住居の付属施設として意識的に整地面を築いた可能性がある。

なお、この住居跡に明確に伴う土器は確認されなかったが、床面から約 30cm 住居跡の壁面に接するような状態で完形の弥生土器（5）が出土した。その形態から、Ⅱ－ 3 の時期に属するものと考えられる。この土器は、出土状態から、直前まで実際に使用されていたものが、住居が廃棄されて間もない時期に埋まったものと判断される。このことから、住居が使用されていた時期もこれに近い時期の可能性が高い。

SK2 は、SH2 の東側斜面約 30cm の近接した位置より検出された土坑である。規模は検出面で直径 125cm、床面で 102cm、深さは最深部で 131.5cm である。斜面で削られているため東側の壁高は西側に比べ約 50cm 低い。平面プランは円形を呈し、断面は長方形である。形状から貯蔵穴と考えられる。この土坑内からは、赤褐色の焼土や炭化物を確認したがその性格は明らかにしえなかった。また、埋土中より弥生土器（7）を確認し、形態からⅡ－ 3 期に属すると考えられる。



第 4 図　SH2・SK2 実測図

○ SH3・SK3・SK4・SK5（第５図）

SH2 の南約 1m、ほぼ遺跡の所在する尾根の中央に位置する住居跡である。住居跡は、ほぼ平坦な地形を、東西約 300cm、南北約 400cm、深さ 60cm 程度掘り込んで造られている。壁は４面で遺存しており、プランは南北方向に長い長方形を呈している。壁高は北東隅で最高 65.2cm を測る。壁溝は東、北西隅、西側で断続的に確認でき、幅約８～ 25cm、深さ約５～ 17cm である。柱穴と考えられるピットは、1 箇所で確認できるのみである。プランとの関係からいえば、主柱穴２本の住居跡を想定しえるが、もう 1 本の主柱穴の存在すべき位置に SK3 が存在しており、重複する柱穴の存在が確認しえていないのが現状である。ただ、SK3 の北壁際に幅 33cm 程度の僅かな窪みがあり、それが想定されるもう 1 本の主柱穴の位置にほぼ重なることから、その痕跡である可能性が高い。ただし、底面レベルからいえば約 15cm の差がある。床面中央には東西 70cm 南北 45cm の不整形な掘り込みを検出した。内部には、炭化物を含んだ土が充満しており、炉跡と考えられる。また、SK3 の上面、SH3 の床面上に縦 32cm、横 17cm、厚さ 7cm の隅丸長方形で上面の平らな石が検出されたが、使用目的は明確にし難かった。

本遺構に伴う遺物は、完形の土器（8）および（9）がある。この他、口縁部を欠き、胴部を半裁された状態の土器（10）が出土しているが、これは床面を一部浅く掘り込み、半裁された断面を上にする状態で据え置かれているように観察され、その使用状態に疑問がもたれた。今後、住居内で検出された土器の中で、このような使用方法をとるものがあるか否か、検討を要するところである。また、住居跡埋土中の遺物として、刀子（33）がある。刀子は、床面から約 14cm 浮いた状態で出土している。

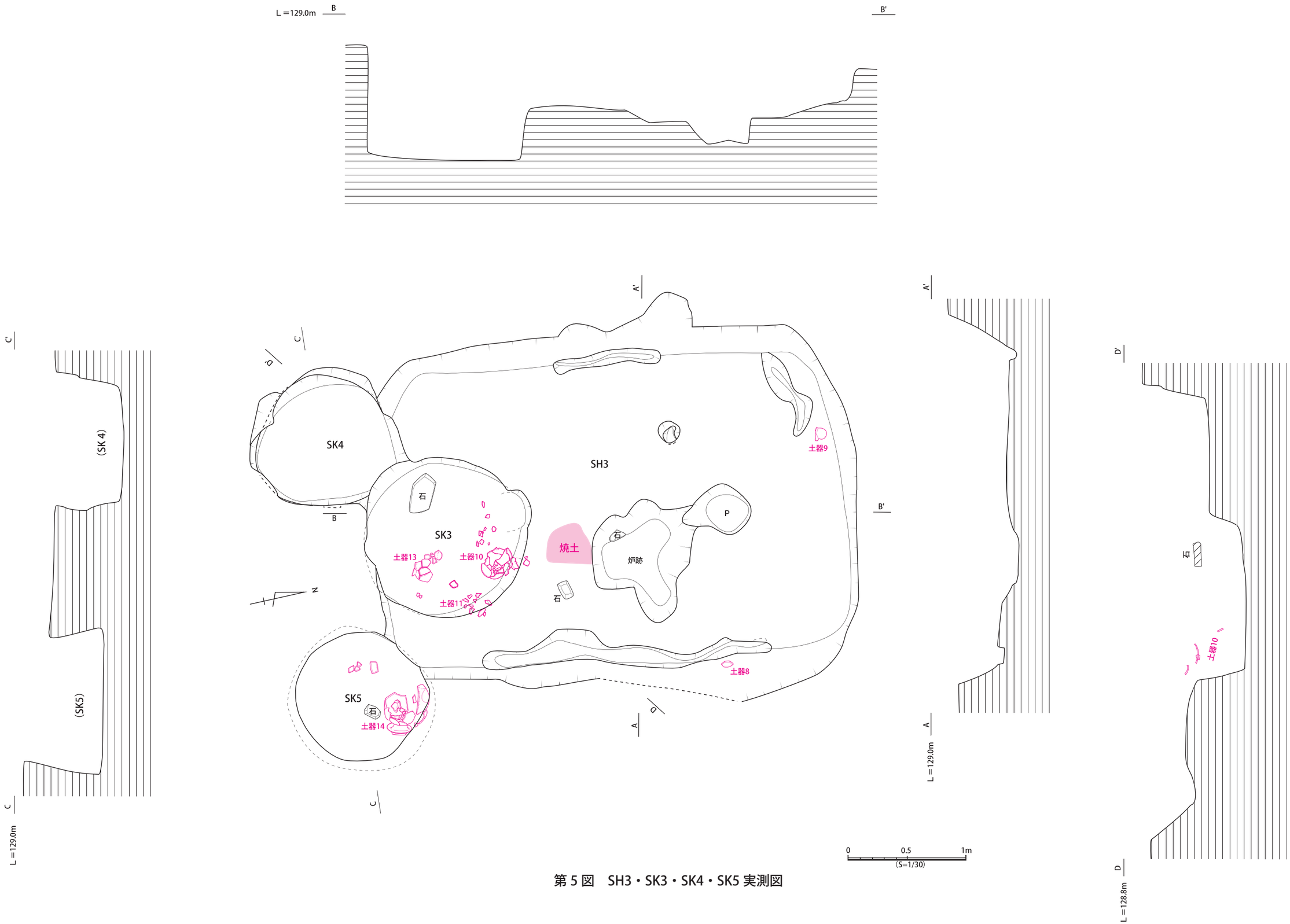
住居の時期は、出土した土器からⅢ－１期と考えられる。土器（10）が口縁部及び胴部半分を欠いているため明言しがたいが、全体が均等に薄く仕上げられており、Ⅲ－２期まで使用されていた可能性も有している。

一方、SH3 の南側に重複する形で SK3、4、5 を検出している。

SK3 は、SH3 の南側の壁に接し、床面から検出した土坑である。規模は検出面で直径 135cm、床面で 140cm、深さは最深部で 51cm である。平面プランは円形を呈し、断面形は床面の広い袋状を呈している。形状から貯蔵穴と考えられる。SH3 との新旧関係については、土層観察から SH3 が廃棄された時点で埋まった状態であったことは確実である。また、接している SH3 の南側壁を詳細に観察すると僅かに SK3 の壁の痕跡が確認でき、その場合 SK3 は SH3 が造られる以前に掘り込まれていたことになり、深さも 86cm あったこととなる。

SK4 は、西側で SH3 と壁を一部重複して検出された土坑である。規模は検出面で直径 125cm、床面で 113cm、深さは最深部で 62cm である。平面プランは円形を呈し、断面は床面の広い袋状を呈している。形状から貯蔵穴と考えられる。時期は内部から遺物が全く出土しておらず、不明である。土層観察によれば、SH3 の東側壁が真直ぐに立ち上がっているのが観察され、SK4 が SH3 に先立って造られていたことが分かる。

SK5 は、西側で SH3 の東側の壁を一部重複して検出された土坑である。規模は検出面で直径 110cm、床面で 125cm、深さは最深部で 68.3cm である。平面プランは円形を呈し、断面は床面



第 5 図　SH3・SK3・SK4・SK5 実測図

の広い袋状を呈している。形状から貯蔵穴と考えられる。また、SH3 の検出時に SK5 との重複部分で SH3 の東壁が連続しているのが観察され、SK5 が SH3 に先行する遺構であるといえよう。

内部からは弥生土器（14）が床面から 12.6cm 浮いた状態で出土しており、その時期からⅡ－２－③期の遺構と考えられる。

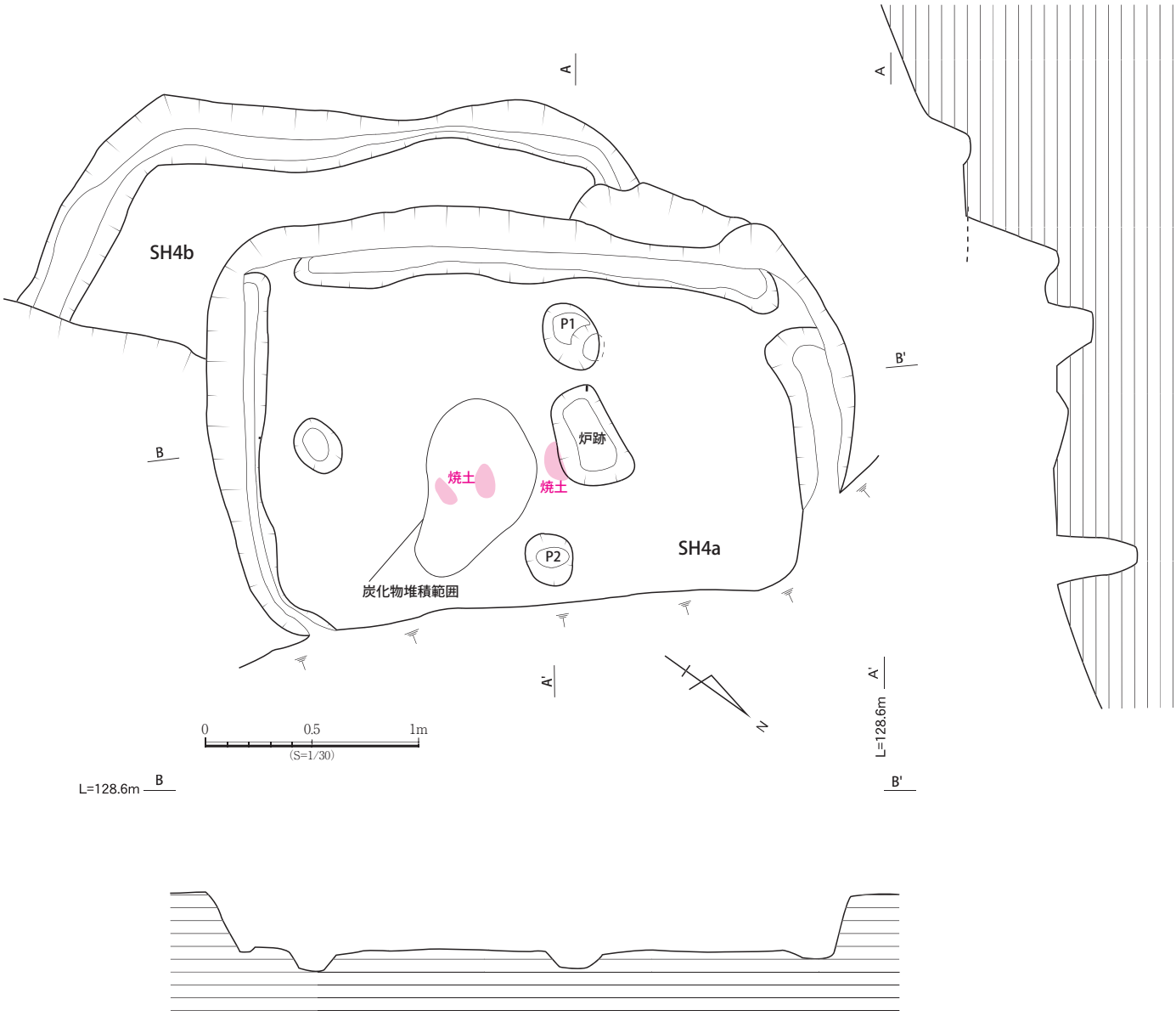
○ SH4（第 6 図）

SH2 の南東 1.4m、遺跡の所在する尾根の北側斜面から検出された住居跡で、北側を流失している。壁は、南、西、東で遺存しており、南側で最高となり、約 45cm である。壁溝は遺存する壁を全周しており、南側の壁の東端で僅かに北側に廻り、消失している。壁溝の幅は 8 ～ 14cm、深さは 4 ～ 6cm である。住居跡のプランは、東壁北端の壁溝の状況等から東西に長い長方形になるものと考えられ、その場合規模は東西方向約 280cm、南北方向約 160cm になる。床面の最高所は標高 127.85m である。

床面からは、主柱穴と考えられるピット P1、P2 を検出しており、それぞれ底面で、長径 38cm、短径 16cm、長径 18cm、短径 10cm、深さ 17cm と 38cm を測り、柱穴間の距離 1m、壁及び壁溝等との関係から 2 本柱の住居となるものと考えられる。また、床面中央からは 30 × 50cm の不整形な方形の掘り込みが検出された。内部には炭化物が混ざった土が充満しており、位置関係等から炉跡と考えられる。なお、この掘り込みの南側で、直径 52cm、厚さ 10cm 程度の範囲で床面上に炭化物が堆積しているのを確認しており、その部分で熱により赤変した個所が存在していることから 、住居使用の過程で炉跡が南側に移動した可能性も考えられよう。ただ、後述するようにこの住居跡に後出する住居が重複して建造されており、これに伴う何らかの施設の可能性も考えられる。

また、当住居跡の西壁西～南側に隣接して、地山を 37cm 程度掘り込んで造成した長さ 210cm、幅 30 ～ 50cm の平坦面を検出した。この平坦面は、規模・形状ともに前述した住居跡と類似しており、壁溝と思われる溝の存在も確認しえることから、住居跡として取り扱うこととした。現状では、西壁および南壁の一部のみ遺存しており、直下に前述したごとく幅 3 ～ 18cm、深さ 3 ～ 6cm の壁溝が全周している。床面等北側の大部分は SH4 と重複していること及び斜面による流失が想定されること等から明確にしえない。ただ、遺構検出の過程で、遺存する床面から想定される住居跡範囲である北側へ、水平に伸びるまさ土の面を部分的に確認しており、これを床面の残存したものと考えるなら、当住居跡が前述した SH4 より後出する可能性が高い。ここで便宜的に前出する住居跡を SH4a、後出するものを SH4b と呼称することとする。

SH4a・b に伴う遺物としては、前者が（15・16）、後者は（17）の弥生土器である。これらは前者がⅡ－２－③期、後者がⅡ－３期であり、遺構についてもその時期に属するものと考えられる。



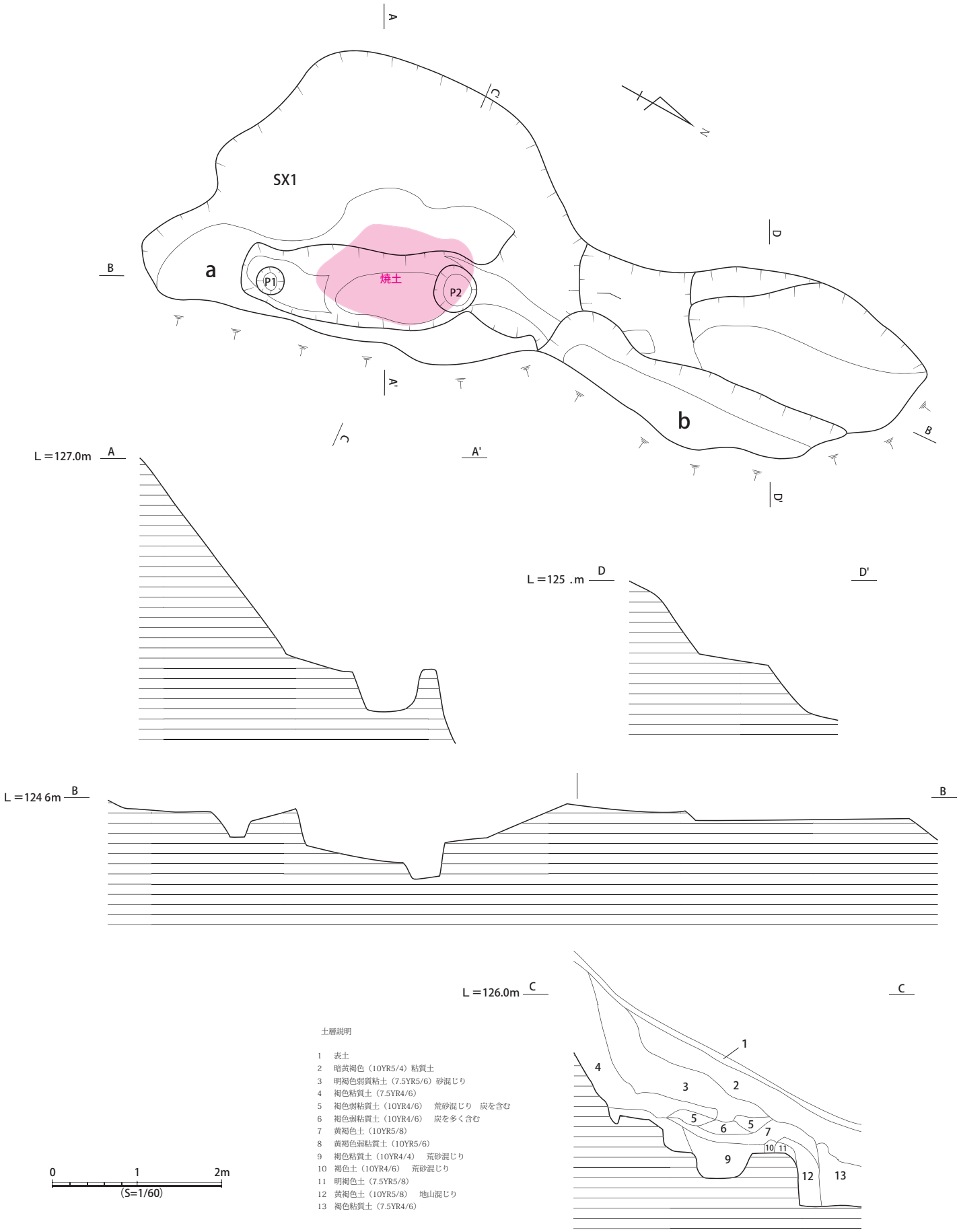
第 6 図　SH4 実測図

○ SX1（第 7 図）

SX1 は遺跡の北側に位置し、SH1 の東南約 3.7m 離れたところにあるテラス状遺構である。遺構は北端から南方向に約 870cm の範囲で、尾根東側の斜面を掘り込み平坦部を作り出している。平坦部は標高が違う、2 つの面から成りたっており、南側の平坦部を a、北側の平坦部を b と呼称する。

a は東斜面を、尾根から高さ約 230cm 削り、標高 124.4m のラインに、南北幅約 470cm、東西約 180cm の平坦部を造りだしている。この平坦部最高所は 124.49m で、平坦部東側は急斜面となる。この平坦部の中央部に、南北 276cm、東西 90cm のくぼみが掘り込まれている。このくぼみの底面は南北 114cm、東西 60cm の長円形で、残存する深さ約 45cm である。

また、この平坦部の中から、2 つのピットを検出した。P1 は底面形状が長径 20cm、短径 16cm の長円形で、底面標高 124.15m である。P2 は底面形状が長径 40cm、短径 32cm の長円形で、底


SX1
a
b
P1
P2
焼土
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
N
L＝127.0m
L＝125 .m
L＝124 6m
L＝126.0m
0
1
2m
(S=1/60)
土層説明
1　表土
2　暗黄褐色（10YR5/4）粘質土
3　明褐色弱質粘土（7.5YR5/6）砂混じり
4　褐色粘質土（7.5YR4/6）
5　褐色弱粘質土（10YR4/6）　荒砂混じり　炭を含む
6　褐色弱粘質土（10YR4/6）　炭を多く含む
7　黄褐色土（10YR5/8）
8　黄褐色弱粘質土（10YR5/6）
9　褐色粘質土（10YR4/4）　荒砂混じり
10　褐色土（10YR4/6）　荒砂混じり
11　明褐色土（7.5YR5/8）
12　黄褐色土（10YR5/8）　地山混じり
13　褐色粘質土（7.5YR4/6）

第７図　SX1　実測図

面標高 123.64m である。P2 の方が P1 よりも径が大きく、51cm ほど深いが、底面形状からみて両方とも柱穴と考えられる。このピット間は 222cm である。

この平坦部上の中央部分に、標高 124.6 ～ 124.7m の地点で、長径 186cm、短径 108cm の歪な長円形の範囲で焼土および炭化物を検出した。この堆積状態から、くぼみの部分を中心に、集中的に火を使う行為を行っていたと考えられる。また P1、P2 の柱穴から何らかの上屋構造の存在が想定され、雨にぬれては支障がある行為を常時行っていた可能性がある。

また b は本遺構の北側に、2 段の平坦部を作り出している。上の平坦部は、尾根の東側斜面を約 107cm 削り標高 124.3m のラインに沿って、下の平坦部はさらに 60cm ほど下の標高 123.6m のラインに沿って作られている。それぞれ上段は南北約 264cm、東西約 78cm、最高所は 124.42m、最低所は 124.20m、下段は南北 300cm、東西 30 ～ 60cm、最高所は 123.81m、最低所は 123.59m で、上下段とも北側に向けてせばまる。どちらの平坦部も作業を行うには狭すぎ、通路としての性格を持つものとも考えられる。この延長線上に SH1 が位置することから、この住居との関係も想定できる。

a の東側斜面の埋土中から弥生土器（18）が出土した。Ⅱ－２－③期のものであり、本遺構はその時期に属するものと考えられる。b の部分からは遺物は出土しなかった。

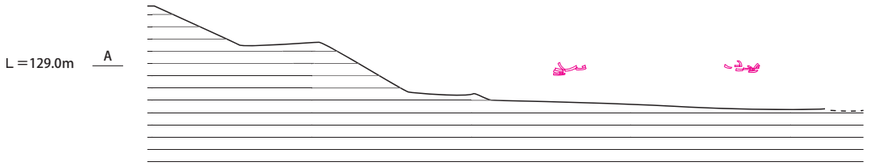
○ SX2・ST1・ST2・ST3（第 8 ～ 11 図）

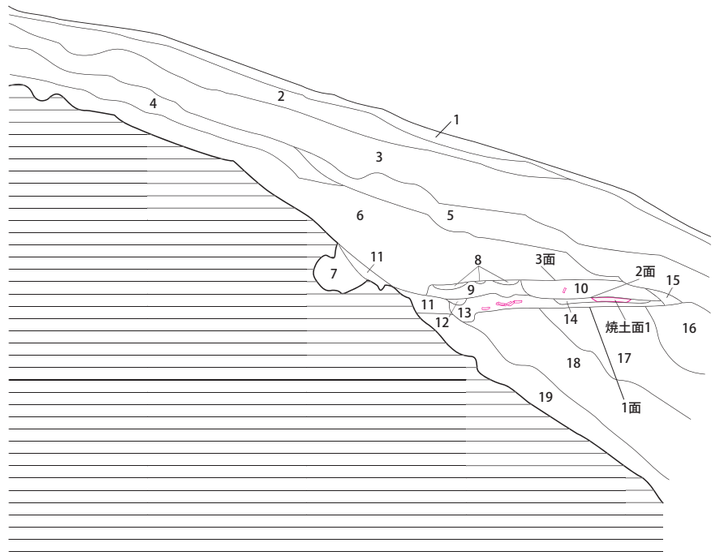
SH3 の南東約 3m、尾根の南側斜面をおよそ 140cm 削り込んで造られた遺構である。地山に残る痕跡は僅かであるが、3 ケ所の土層観察の結果によれば人工的に造成された 3 つの平坦面の存在が確認され、少なくともその中の 2 面については焼土面が伴い、他の 1 面は明確に土器が伴うことから、これらが生活に関連した何らかの施設であることが予想された。遺構を掘り下げる過程での観察によれば、ある程度掘り下げた段階で一部に土色の変化する部分が観察されたものの、遺構の掘り方と言えるほど明確な変化とは言えず、プラン等の明確な確認はしえなかった。また、柱穴や炉跡等の掘り込みも観察しえず、ここでは一応生活に使用した平坦面としてとらえ、テラス状遺構として取り扱うこととする。

現状では、地山に残された痕跡は 2 ヶ所ある。遺構北西側及び南側で検出した 2 つの平坦面がそれである。

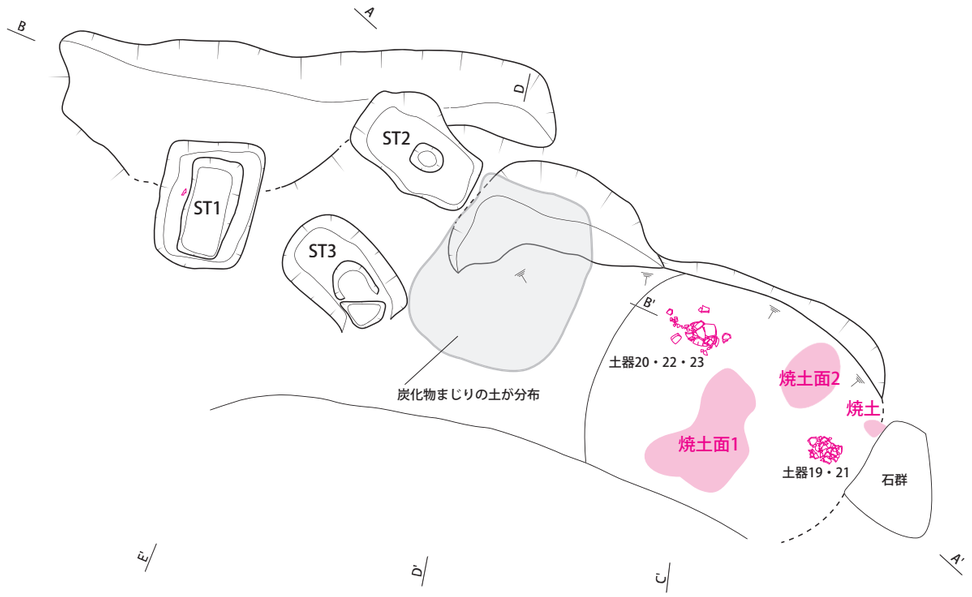
土層との関係で言えば、土層 C で観察された三面の平坦面の内、床面レベルで考えれば最下層である第 1 面及び第 2 面は土層 D・E では観察できず、土層 C における第 9・10 層以下のレベルで確認された、前述した土色の変化する部分の範囲である SX2 南側の東西 2.2m、南北 2.7m の範囲の平坦面が最初に使用されていた可能性が高い。遺物の出土状況から見ても最も低いレベルから出土する土器の分布範囲がこの付近に限定されることがこれを傍証していよう。弥生土器（19・20・21・22・23）等はこの面に伴う土器である。

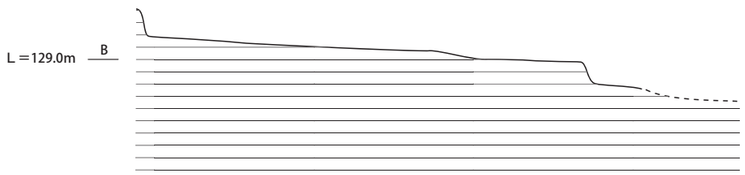
第 2 面についても、土層 D・E では存在が確認できないため前述したとおりであるが、この面に対応する高さで焼土面 1 も存在することから、第 1 面とそれほど変わらない範囲で使用された平坦面があったものと考えられる。明確に第 2 面に伴う土器は出土していないため、時期について

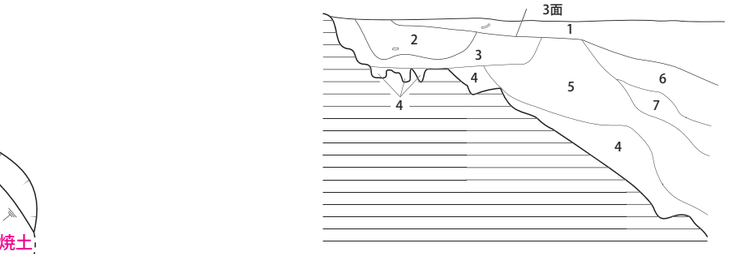




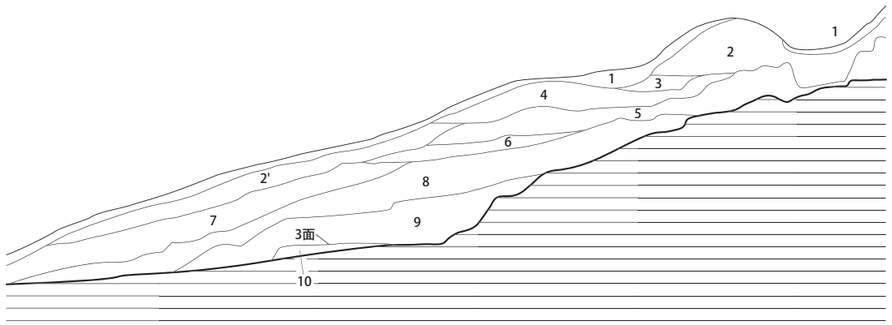
土層説明
1　表土
2　黄褐色（10YR5/6）砂質土層　0.5mm程度の小礫を多く含む
3　黄褐色（10YR5/6）粘質土層
4　にぶい黄褐色（10YR5/4）土層　粗砂混じる
5　褐色（10YR4/4）粘質土層　粗砂混じる
6　明褐色（7.5YR5/6）土層　2～3mmの小礫を少し含む
7　褐色（10YR4/6）砂質土層　粗砂が多く混じる
8　真砂土　（貼床か）
9　明褐色（7.5YR5/8）土層　粗砂、炭を少量含む
10　橙色（7.5YR6/8）土層　土器を含む
11　黄褐色（10YR5/6）土層
12　褐色（7.5YR4/6）土層
13　黄褐色（10YR5/8）土層　遺物を多く含む
14　明褐色（7.5YR5/6）土層　焼土含む
15　明褐色（10YR5/6）土層
16　黄褐色（10YR5/8）弱粘質土層
17　明赤褐色（5YR5/8）弱粘質土層
18　明褐色（7.5YR5/6）土層
19　明褐色（7.5YR5/8）弱粘質土層







土層説明
1　褐色（10YR4/6）土層　遺物含む
2　褐色（10YR4/4）土層　炭多量に混じり、遺物を含む
3　褐色（10YR4/4）土層
4　褐色（10YR4/6）　細砂層　細砂混じる
5　明褐色（7.5YR5/6）弱粘質土層　真砂混じる
6　黄褐色（10YR5/8）弱粘質土層
7　明黄褐色（10YR6/6）土層



土層説明
1　表土
2　黄橙色（10YR8/8）砂層
2'　明黄褐色（10YR6/6）土層
3　明黄褐色（10YR6/6）土層　砂状、礫痕多く混じる
4　明黄褐色10YR7/6土層
5　黄橙色（10YR7/8）土層　粒子細かく、砂状
6　黄橙色（10YR8/6）砂層　小礫を多く含む
7　黄褐色（10YR5/8）弱粘質土層　砂混じる
8　明褐色（7.5YR5/8）土層　黒色土が少し混じり黒ずんでいる
9　明褐色（7.5YR5/6）粘質土層
10　褐色（10YR4/4）粘質土層

0　1　2m
(S=1/60)

第 8 図　SX2・ST1・ST2・ST3　実測図

明言しがたい。

一方、土層D・Eにおいて、平坦面として存在が確認できるのは、標高129.15mの面、土層Cにおける第3面にあたる面である。この面は、高さから考えて遺構の北西側に残存する南北2.8m、東西1.2mの平坦面に対応する面と考えられ、南に偏った位置からもこの面に対応する焼土面2が存在することから、北西側の平坦面から前述の第1面、第2面で使用された面の南端あたりまでの南北8.4m、東西2.8m程度の規模の大きな平坦面であったことが想定される。これに伴う遺物等は明確でない。ただ、この平坦面北側には、後述する墓坑ST1・2・3が掘り込まれており、これらの墓坑の周辺にはⅢ－1期の土器が分布していることから、第3面についてもそれに近い時期に使用を終えた可能性が高い。

ST1は、3基の土坑の内、最も北側の位置にあり、他の2基に対して直行する向きに掘られている。規模は、長さ126cm、幅96cm、深さ34.7cmを測る。底部には長さ95cm、幅51cm、深さ11.7cmの2次坑が掘り込まれており、規模的に小型のためにやや疑問は残るが、形態から墓坑と考えられる。頭位は東側が高いことからそちら側にあると考え、主軸はN71°Eにとる。遺物は、北側の1次坑上、底面から11.9cm浮いた地点から鋒を東に向けた鉄鏃（34）が出土しており、棺外に供献されたものと考えられる。また、墓坑内東半部、2次坑底部から47.3m浮いた地点から土器（29）が出土しており、墓坑上に供献されたものと考えられる。

ST2は、ST1の南側、南北方向に平行して並んだ2基の土坑の内の東側の1基である。規模は、長さ131cm、幅85cm、深さ66.3cmを測る。底部中央南よりに性格不明のピットがある。規模は底面の直径18cm、深さ46.2cm、底面レベル128.1mである。形状的には柱穴に酷似している。内部からの出土遺物は皆無である。性格についてであるが、出土遺物の皆無な現状では不明といわざるを得ない。ただ、ST1・2・3を全体としてとらえたとき、互いに近接した位置に互いを意識して築造されていると観察され、その関係の深さをうかがわせる。さらに、規模的にもほとんど酷似しており、ST1が墓坑であるとすれば、他も同様に墓坑と考えざるを得ないのである。その場合、頭位は北側が高いことからそちら側にあると考え、主軸はN 2°Eにとる。

ST3は前述した南北方向に平行して並んだ土坑の西側の1基である。全体に残存状態は悪く、南側の側壁の大部分は斜面により流失しているものと考えられる。規模は、長さ120cm、幅84cm、深さ47.6cmを測る。頭位は北側が高いことからそちら側にあると考え、主軸はN 5°Eにとる。底部南側には掘り込み2ヶ所があるが、前述したように残存状態の悪い部分にあたることから、明確に遺構に伴うものとは言い難い。

また、前述した掘り下げの過程で、これらの墓坑のさらに南側に隣接して、東西1.8m、南北1.5mの範囲で炭化物の混ざった土の分布する範囲があることを観察した。これは土層Dによれば第3面から掘り込まれた土坑であった可能性が高いが、一部上面が若干削られている可能性も考えられる。遺構中央に残る平坦面はこの土坑の範囲と重なる部分が多いことから、土坑の痕跡と考えることもできようが一部にその範囲をはみ出た部分もあり、明言しがたい。この土坑の性格についてであるが、内部から出土した土器を見れば、ST1とほぼ同時期になると考えられ、方向も概ね平行しているように観察されることから、この土坑も他のものと同様に墓坑であった可能性が考えられよ

う。

最後に、これらの遺構の時期であるが、SX2 の第 1 面（C －第 13 層）に伴う土器がⅡ－ 3 期のものであり、第 3 面上の土器がⅢ－ 1 期のものであることから、第 2 面についてもそのいずれかに属しているものと考えられる。ただし、第 1 面中にⅡ－ 2 －③期の弥生土器を含んでいるため、使用開始時期がその時期までさかのぼる可能性は考えられよう。また、ST1 及び南側に隣接する掘り込み内出土の遺物がⅢ－ 2 の時期に属し、周辺から出土した土器もそれほど古くならないことから、ST2・3 も ST1 とそれほど隔たらない時期に属している遺構である可能性が高い。

○ SX3（第 12 図）

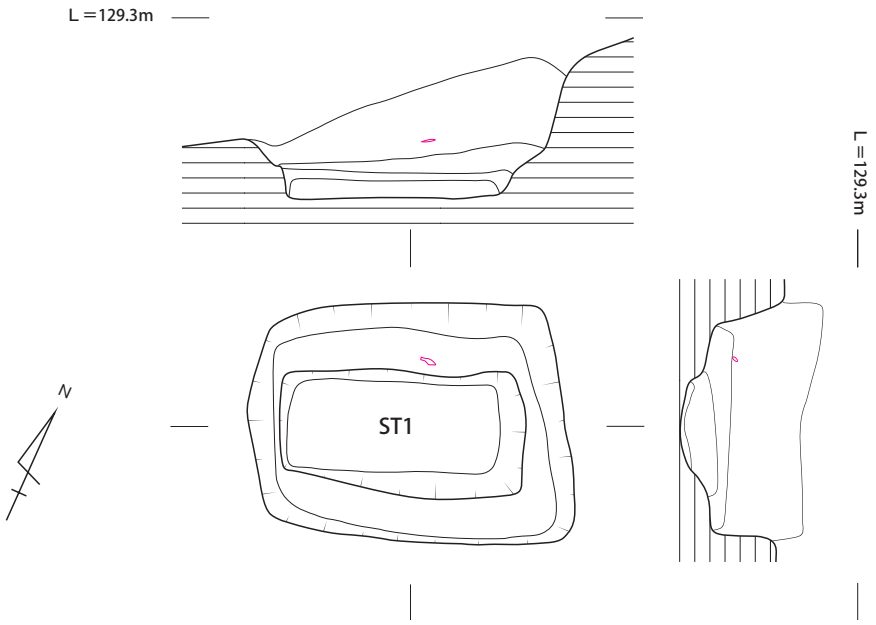
本遺跡中、最高所に位置する遺跡である。現状では、斜面を東西 390cm、南北 120cm 程度掘り込んで造られており、幅 380cm、長さ 200cm の平坦面が残存している。斜面と平坦面の境界には、部分的に溝が存在しており、幅 7 ～ 17cm、深さ最大 7.2cm である。平坦面上には、角礫がならんでいるが、南側については、一部地山に含まれており、他のものも斜面を削り込んだ際にそこに多く含まれていた礫を敷き並べた結果と考えることもできよう。また、前述した溝との関係からいえば、礫を敷き並べた平坦面に比べて、10cm 程度高くなっており、礫の上に土がひかれていた可能性が高い。壁溝の存在から考えれば、住居跡という考え方もできようが、炉跡、柱穴等も確認できないため、一応テラス状遺構としておく。

遺物としては、埋土中から出土した弥生土器（30）があり、Ⅱ－ 3 期に属しており、遺構の時期もそれに近いころにあるものと考えられる。

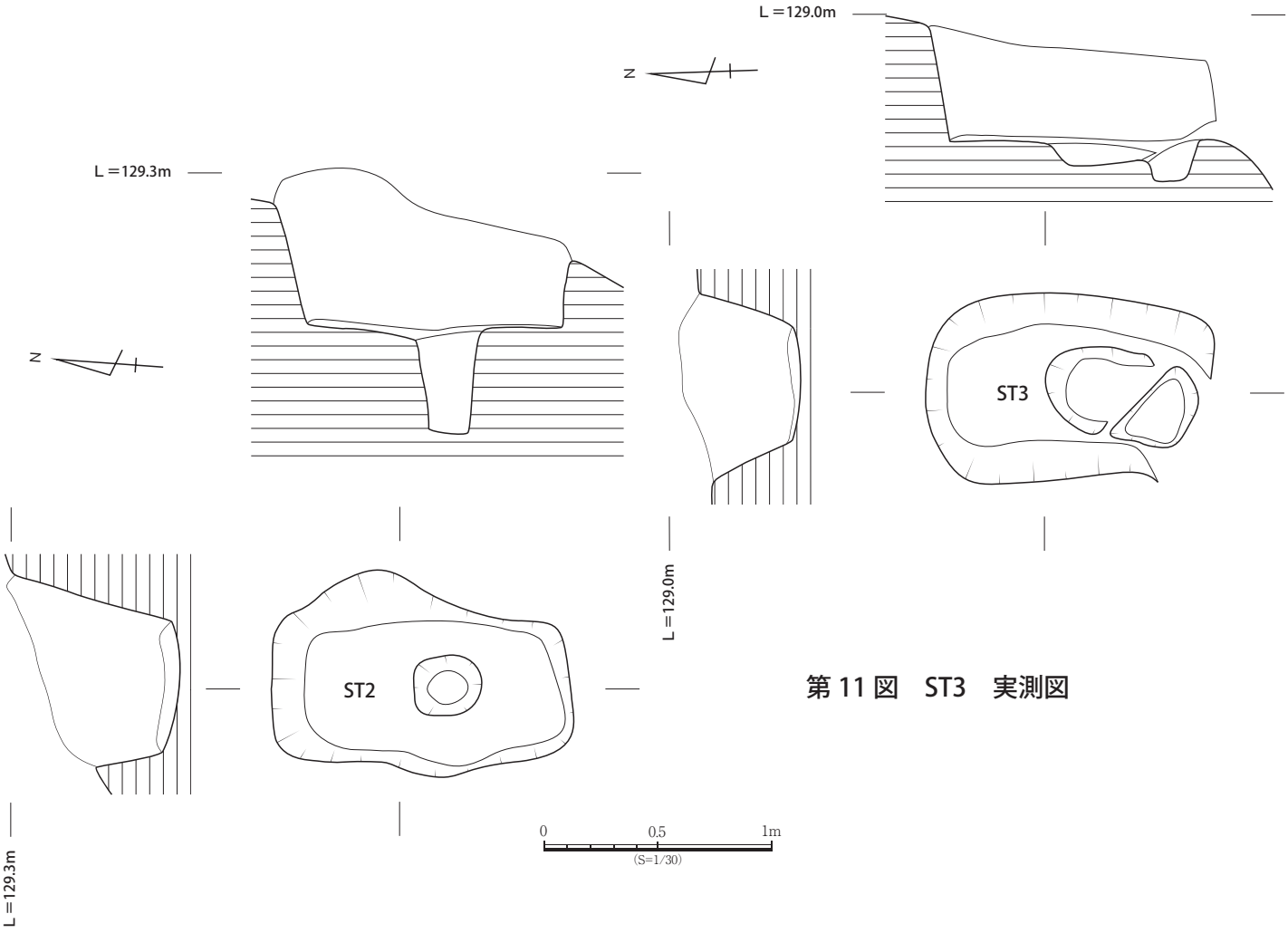
○ SK6（第 13 図）

SK6 は、SH4 の東約 20m、主な遺構の所在する尾根より下り、かなり離れた位置から検出された土坑である。平面形状は楕円形、断面形状は上部がやや袋状を呈する逆台形で、底面の規模は長径 85cm、短径 72cm、深さは現状最大 98.5cm、標高 125.09m を測る。その形状、規模から貯蔵用と考えられる。斜面で削られているため北側の壁高は南側に比べ約 53cm 低い。

なお､埋土中より弥生土器（31）を確認した。その特徴からⅡ－ 3 期に属するものと考えられる。

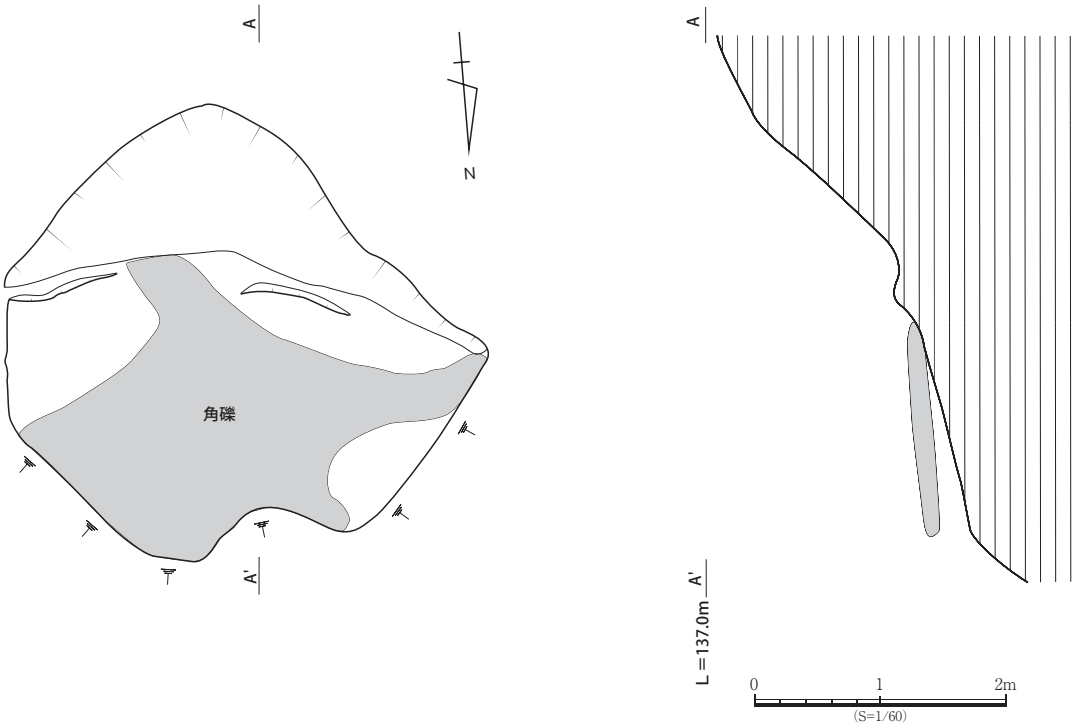


第 9 図　ST1　実測図

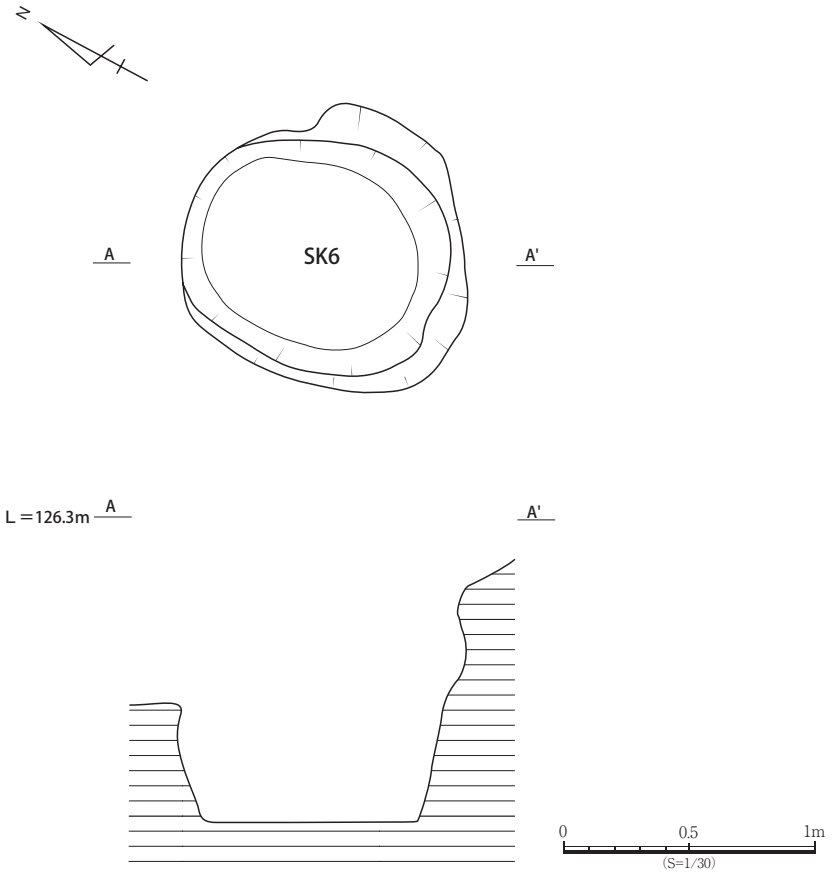


第 11 図　ST3　実測図

第 10 図　ST2　実測図



第 12 図　SX3　実測図



第 13 図　SK6　実測図

3. 出土遺物（第 14 ～ 17 図）

本遺跡の出土遺物としては、弥生土器・鉄器等があるが、遺構に伴う遺物が少ない。ただし、遺構に伴わない遺物でも、本遺跡の存続時期外のものも含め、特徴的なものを報告する。以下、各遺物について述べるが、個々の土器及び鉄器等の詳細については、後掲する観察表を参照されたい。

○弥生土器（第 14 図～ 17 図）

段之原山遺跡出土の土器を概観すれば以下のとおりとなる。すなわち、主な特徴としては、出土土器の大半を占めるのが、端部を平たくおさめるものの口縁部中位から強く外湾する特徴を示し、ほぼ丸胴、丸底化した体部を持つⅡ－３期のものであり、広島湾沿岸の弥生集落で最も多く出土が報告されているⅡ－２期のものは限られた量しか出土していない点である。

実際に、遺構内から出土した土器をみても、最古の時期のものは SK1・5、SX1、SX2 第 1 面などから出土したⅡ－３期の直前であるⅡ－２－③期の土器と言えよう。また、これらの遺構がその位置関係からそれぞれ SH1 及び SH2 との関係を予想させる遺構だけに、これらの住居跡の使用期間の上限を想定する上で参考としうる事実である。ただ、調査区内出土の土器の中で③期の土器の占める割合は極めて小さく、絶対量も少ないことから、Ⅱ－３期の土器の使用された時期に集落の存続期間の中心があるものと考えられよう。

出土土器の中心を占めるⅡ－３期の土器が出土する遺構としては、SH1、SH2、SH3、SH4、SX2 の大部分、SX3 及び SK2 である。これらの内部及び周辺で出土する遺物のほとんどがこの時期に属しており、この時期が遺跡の中心を成すのは前述したとおりである。

また、これに続く時期の土器としては、SH3 及び ST1 ～ 3 周辺出土の一連の土器があげられよう。これらは何れも器厚を減じながら端部を薄く仕上げた口縁部を持つⅢ－１期に属する土器で、SH3 出土の土器（10）についてはⅢ－２期に属する可能性も持っている。ただ、この時期に属する土器は、Ⅱ－２－③期の土器以上に出土量、出土地点は限られている。また、それに次ぐⅢ－２期の土器は ST1 及びその南側の落ち込み内出土のものに限られ、本集落の使用時期の下限が推測しえる。

以上のように、遺跡内から出土した土器を概観すれば、時期的に一定の偏りがみられ、各遺構の使用期間を想定する際に慎重な取り扱いが求められるところである。

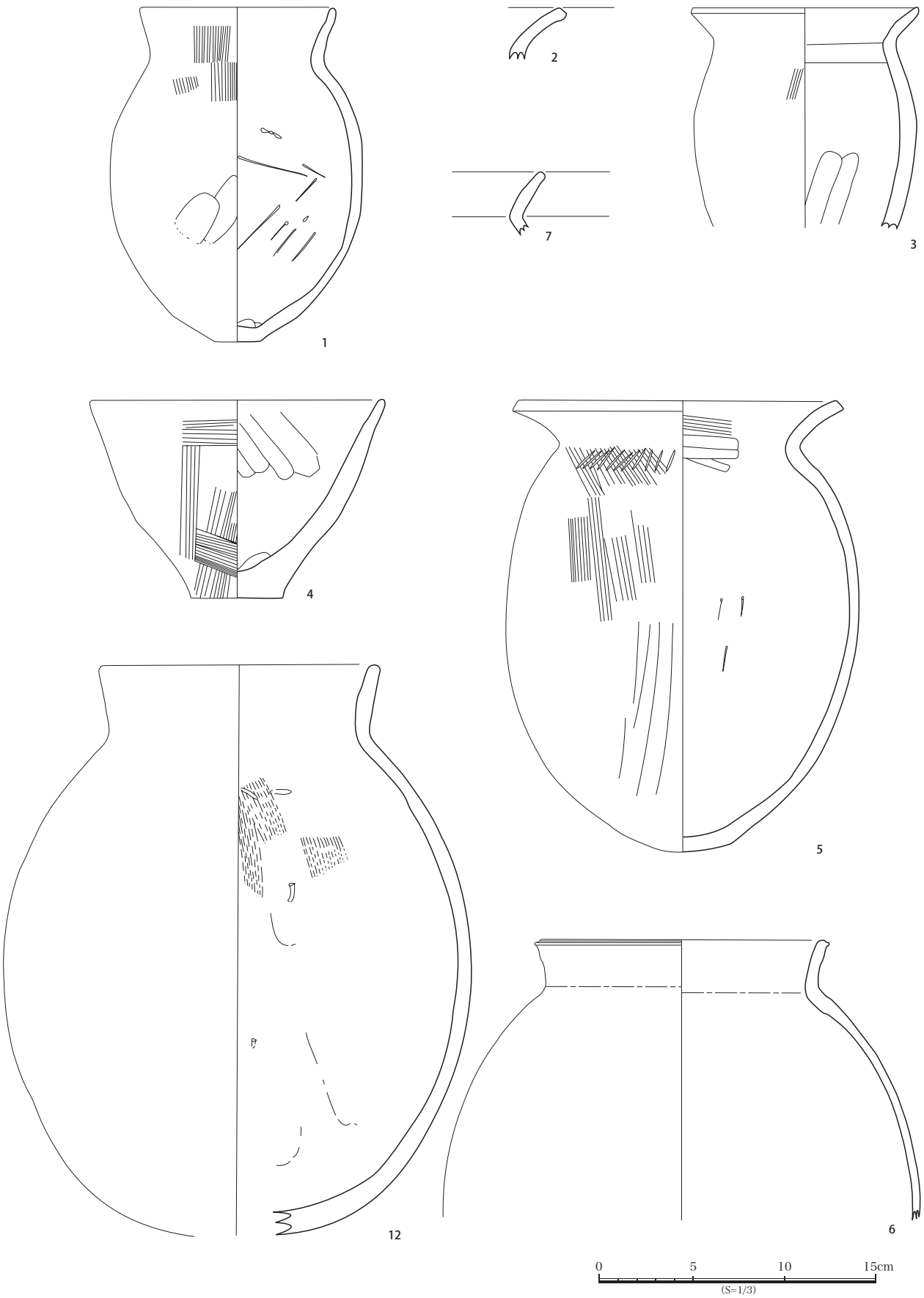
○鉄器（第 17 図－ 32 ～ 34）

（32）は、SH1 埋土中から出土した鉈である。現存長 26mm、身部幅 13mm、刃部長 19mm を測り、断面 V 字形で、鎬を有している。現状では身部の断面は三日月形を成しているが、刃部と身部の境目あたりで折損している可能性も否定できないため明言しがたい。

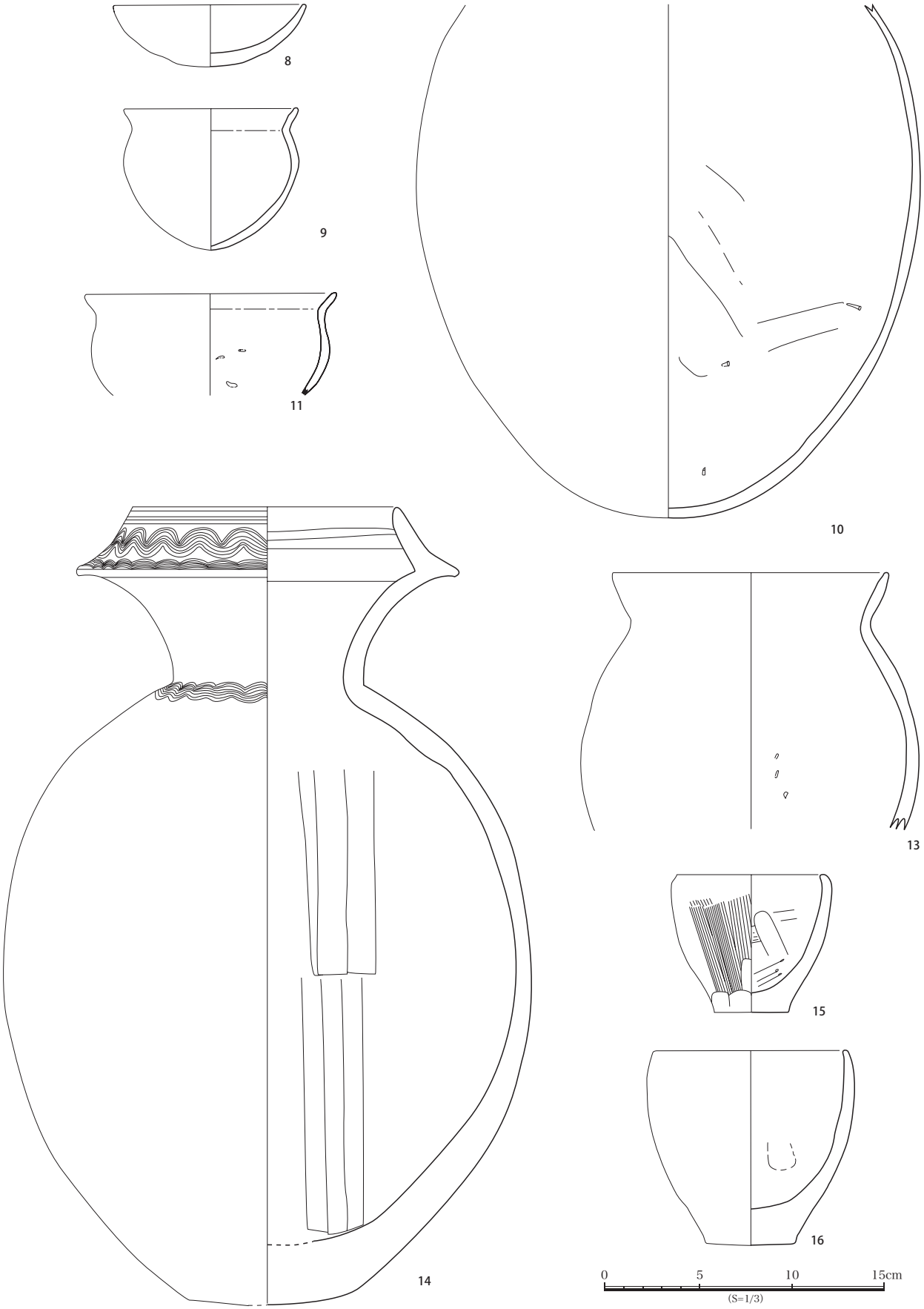
（33）は、SH3 埋土中から出土した刀子である。全長 47mm、刃部長 25mm、幅は中央で 12mm、厚さは 2mm を測る。関は両関となり、断面台形の茎部がそれに続く。茎部長 22mm、幅は中央で 8mm、厚さも中央背側で 5mm を測る。小型品である。

（34）は、ST1 から出土した柳葉形の鉄鏃である。現存長 51mm で茎部先端を欠失している。

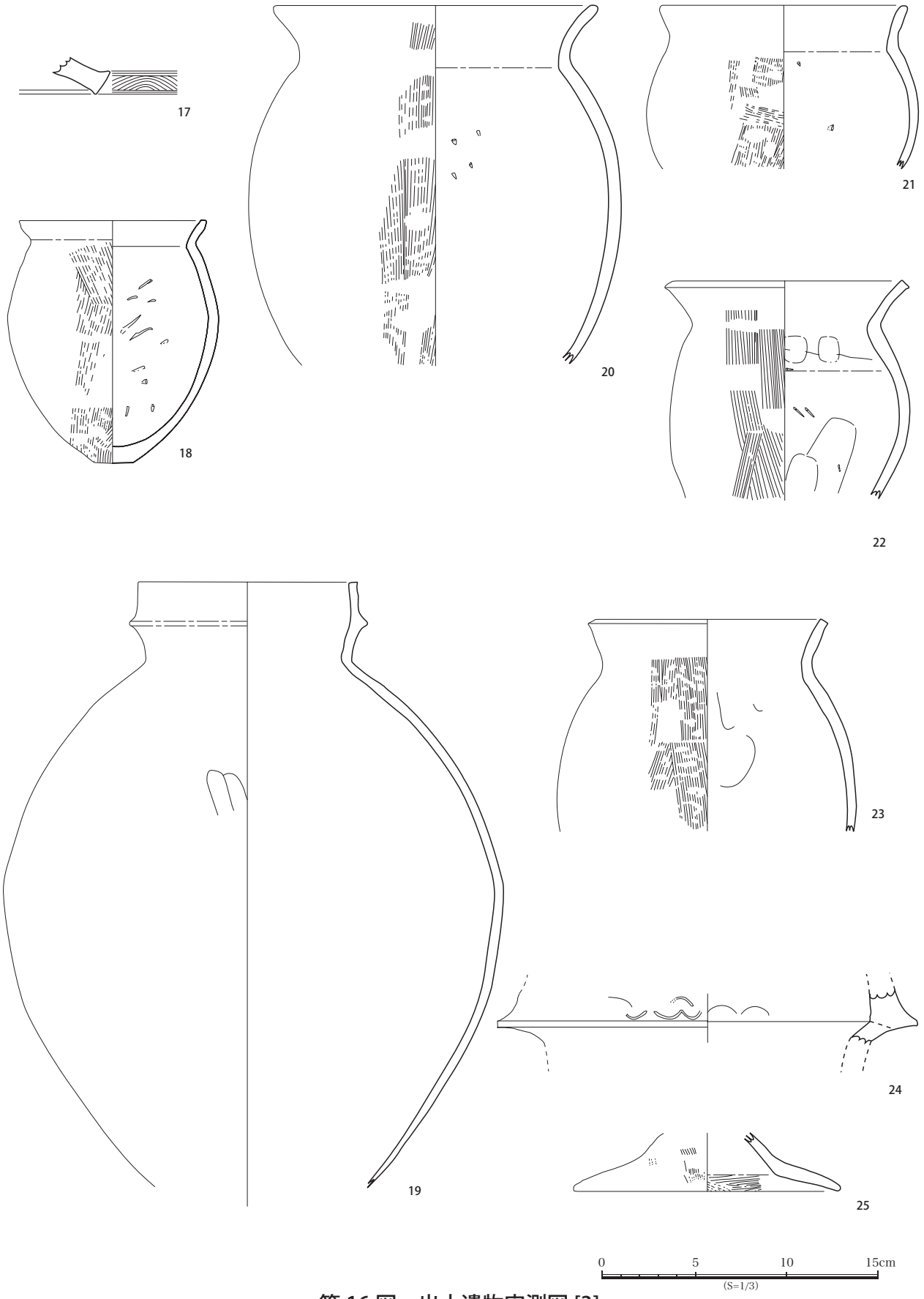
刃部長 28mm、最大幅は刃部中央付近で 12mm、断面レンズ状で厚さ 3mm、明瞭な関を有する。茎部は先端に行くにしたがって徐々に細くなり、前述したごとく端部を欠失している。残存する茎部長は 23mm、幅及び厚さは関部分で 8mm 及び 3mm を測る。



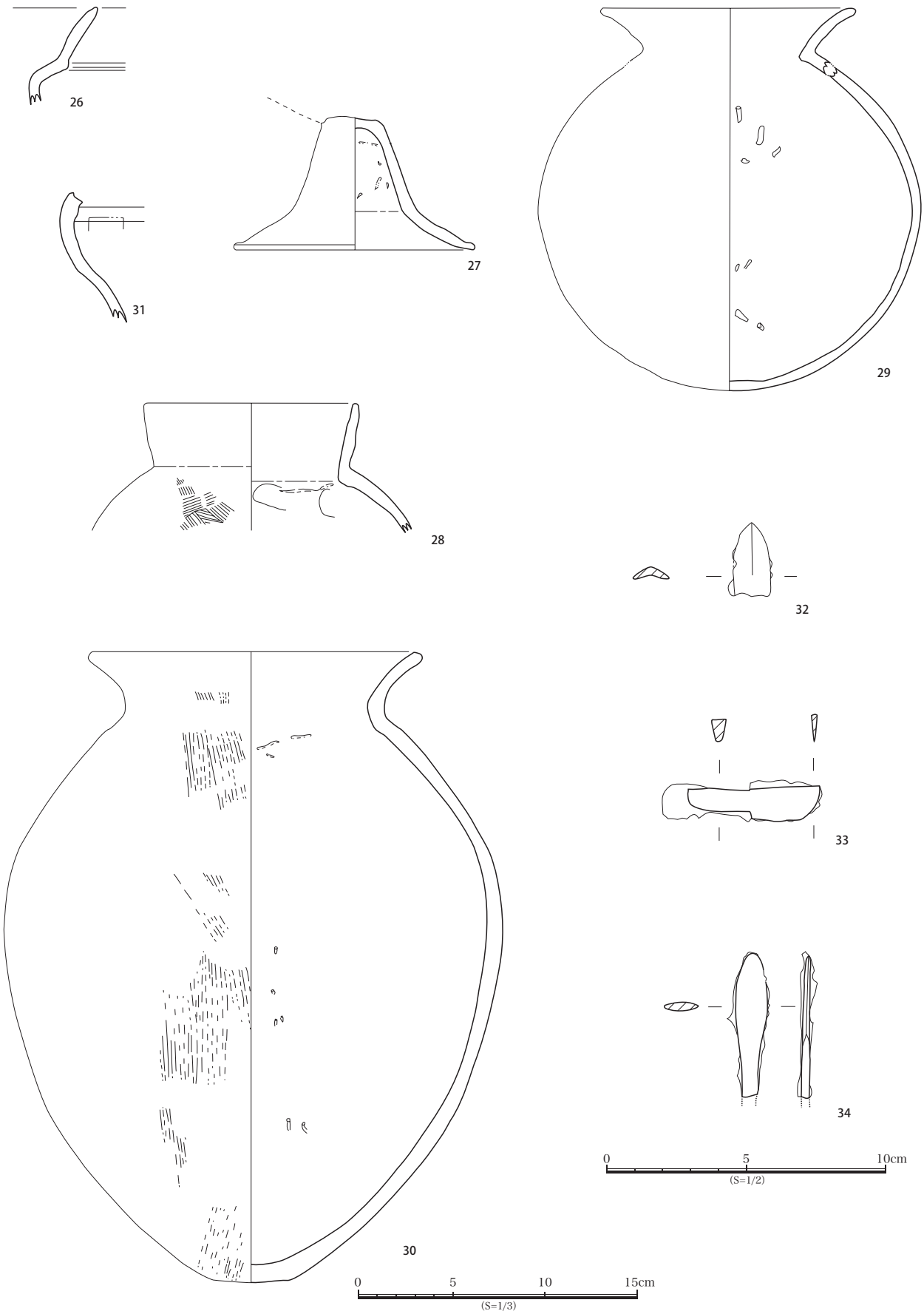
第 14 図　出土遺物実測図 [1]



第 15 図　出土遺物実測図 [2]



第 16 図　出土遺物実測図 [3]



第 17 図　出土遺物実測図 [4]

第１表　出土遺物観察表

（[　]：復元値）

番号	器種	出土位置	寸法 (cm)	器形	調整・成形	備考
1	甕形土器	SH1 埋土中	口径 [10.4] 胴部最大径 13.4 底径 2.4 器高 18.1	口縁部は、「く」の字状に外反し、端部は器厚を減じつつ丸く収める。 胴部は倒卵形を呈し、底部は平底である。	外面　口縁部ハケ目、頸部ナデ　以下ハケ目。 内面　頸部ヘラ削り、底部指頭圧痕。	胎土　1mm 大の砂粒含む 焼成　やや軟調 色調　黄褐色～赤褐色 外面底部にスス付着
2	甕形土器	SH1		口縁部は器厚を減じつつ外反し、端部は僅かに肥厚し、平らに収める。	外面　ナデ。 内面　ナデ。	胎土　1mm 大の砂粒含む 焼成　良好 色調　淡赤褐色
3	甕形土器	SH1	口径 [12.2] 胴部最大径 [12.0]	口縁部は「く」の字状に外反し、端部はわずかにつまみ出しながら平らに収める。	外面　口縁部ナデ、以下不明瞭。 内面　口縁部ナデ、胴部以下ヘラ削り。	胎土　1 ～ 2mm 大の砂粒を含む 焼成　やや軟調 色調　赤褐色
4	鉢形土器	SK1 埋土中	口径 [15.2] 底部径 [5.0]	平底の底部から外湾して上方に立ち上がった胴部は、上位 2/5 あたりから直線的に外上方に伸びる。端部は外傾気味に丸く収める。	外面　口縁部ナデ、胴部以下ハケ目。 内面　口縁部ナデ、胴部以下ヘラ削り。磨耗激しい。	胎土　精緻 焼成　軟調 色調　外面　黄土色～赤茶色　ススが付着 内面　黄褐色スス付着
5	甕形土器	SH2 埋土中	口径 [17.2] 胴部最大径 19.0 底径 2.0 器高 24.6	口縁部は「く」の字状に外反し、端部を平らに収める。胴部は倒卵形を呈し、頸部は内側に肥厚する。底部はやや平らである。	外面　口縁部　ナデ、肩部にハケ目の後、刺突状工具による線状の施紋を 1 段施す。胴部ハケ目、それ以下ヘラ削り。 内面　口縁部ナデ、頸部ミガキ、それ以下ヘラ削り後ナデ。	胎土　精緻 焼成　良好 色調　黄赤褐色 外面　一部にスス付着
6	壷形土器	SH2 埋土中	口径 [16.0] 胴部最大径 [25.8]	口縁部は「く」の字状に外反し、外上方にやや傾きながらたちあがる。端部はつまみだしつつ平らに収める。胴部は器厚は薄く仕上げ、内湾しつつ立ち上がる。	外面　ナデ。 内面　ナデ。 口縁端部に 1 条の凹線をめぐらす。	胎土　精緻 焼成　良好 色調　にぶい黄橙色～橙色 外面に黒斑あり。一部にスス付着
7	甕形土器	SK2 埋土中		口縁部は器厚を減じつつ「く」の字状に外反し、端部は平らに収める。	外面　ナデ。 内面　ナデ、口縁端部に指頭圧痕。	胎土　1mm 大の砂粒含む 焼成　良好 色調　にぶい黄橙色
8	碗形土器	SH3	口径 10.2 器高 3.3	口縁部は上方にのび端部は丸く収める。胴部は器厚を減じながら緩やかに内湾しつつ立ち上がる。底部は丸底である。	外面　ナデ。 内面　ヘラ削り後ナデ。	胎土　1 ～ 3mm 大の砂粒含む 焼成　良好 色調　橙～黄橙色
9	鉢形土器	SH3	口径 [9.2] 胴部最大径 [9.4] 器高 7.6	口縁部は「く」の字状に外反し、上方に器厚を減じつつ、端部は丸く収める。胴部は内湾気味に立ち上がり、底部は尖りぎみな丸底である。全体を非常に薄くしあげる。	外面　ナデ。 内面　ナデ。 全体的に磨耗が著しい。	胎土　0.5mm 大の砂粒含む 焼成　軟調 色調　橙色
10	甕形土器	SH3	胴部最大径 [27.0]	胴部は長胴型を呈し、底部は丸底である。器厚は非常に薄く仕上げる。	外面　ハケ目後ナデ。 内面　ヘラ削り後ナデ。	胎土　1mm 大の砂粒多く含む 焼成　良好 色調　淡黄色　底部にスス付着
11	鉢形土器	SH3	口径 [13.2] 胴部最大径 [12.7]	口縁部は「く」の字状に外反し、上方に器厚を減じつつ端部は尖り気味に丸く収める。胴部は内湾気味に立ち上がり、胴部最大径の器厚が最大となる。	外面　ナデ、磨耗が激しい。 内面　口縁部までナデ、胴部ヘラ削り後ナデ。	胎土　1mm 大の砂粒含む 焼成　やや軟調 色調　淡黄色
12	壷形土器	SH3 埋土中	口径 [14.8] 胴部最大径 [25.2]	口縁部は緩やかに外反し、中位で器厚内側にやや厚くなり、端部は丸く収める。胴部は長胴を呈し、最大径が中位付近にある。	外面　ナデ。 内面　口縁部ナデ、胴部ハケ目後ナデ。	胎土　0.5 ～ 3mm 大の砂粒含む 焼成　やや軟調 色調　外面　赤褐色・一部橙色 内面　赤褐色

番号	器種	出土位置	寸法 (cm)	器形	調整・成形	備考
13	甕形土器	SK3 埋土中	口径 [14.8] 胴部最大径 [18.1]	口縁部は「く」の字状に外反し、中位で器厚が外側に肥厚し、端部は尖り気味に丸く収める。胴部は内湾しながら立ち上がる。	外面　ナデ。 内面　ヘラ削り後ナデ。	胎土　1～3mm 大の砂粒含む 焼成　軟調 色調　赤褐色
14	壷形土器	SK5 埋土中	口径 14.0 最大径 28.4 底径 [8.2] 器高 42.7	口縁部は外湾しつつ外上方にのび、口縁端部内面から、内傾する拡張部を作り出した複合口縁である。端部は尖り気味に丸く収める。胴部は長胴型を呈し、頸部下方部は肥厚している。胴部最大径の付近は器厚がうすいが、全体的に、厚い器厚をもつ。底部は平底である。	外面　口縁部ナデ、口縁拡張部に 4 条の凹線、その下に 8 条、6 条の波状紋をめぐらす。また、頸部に 8 条の波状紋をめぐらす。 内面　口縁部、頸部ナデ、以下ヘラ削り。	胎土　精緻 焼成　良好 色調　明褐色～橙色
15	鉢形土器	SH4	口径 [8.3] 最大径 8.7 底径 4.0 器高 7.4	口縁端部は内傾し、平らに収める。胴部は、底部から体部にかけては外湾しながら立ち上がり、口縁部にかけては器厚を減じながら内湾する。底部は平底。	外面　口縁部ナデ、体部ハケ目。 体部から底部にかけて指頭圧痕。 内面　口縁部ナデ、以下ヘラ削り。	胎土　1mm 大の砂粒含む 焼成　良好 色調　外面　暗茶褐色 内面　赤褐色
16	鉢形土器	SH4 埋土中	口径 [10.4] 底径 4.8 器高 10.4	胴部下位 1/3 から口縁部にかけて緩やかに内湾しながら上方に立ちあがり、口縁端部は尖り気味にまるく収める。底部から体部にかけては外湾しながら立ち上がる。底部は平底である。	外面　磨耗が激しい。 内面　指頭圧痕あり。	胎土　2mm 大の砂粒多く含む 焼成　軟調 色調　にぶい赤褐色
17	器台	SH4		脚端部を平らに仕上げ、両側に肥厚している。	外面　脚部ハケ目　脚端部に上下 2 条の凹線、その間に 7 条の波状紋が施されている。 内面　ヘラ削り。	胎土　精緻 焼成　良好 色調　橙色
18	甕形土器	SX1	口径 [10.0] 胴部最大径 11.4 底径 2.1 器高 13.2	口縁部は「く」の字状に外反し、端部は外側へ肥厚しつつ平らに収める。胴部は倒卵形を呈し、底部から体部にかけて外湾する。底部は平底。	外面　口縁部ナデ、以下ハケ目後ナデ。 内面　口縁部ナデ、以下ヘラ削り後ナデ。	胎土　0.5～2mm 大の砂粒含む 焼成　軟調　表面のひび割れが激しい 色調　赤褐色　一部鈍い黄橙色
19	壷形土器	SX2	口径 [11.6] 胴部最大径 [27.6]	「く」の字状に外反する口縁部に上方にのびる拡張部を接合する、複合口縁。端部は薄く平らに収める。胴部は内湾しながら立ち上がり、胴部下方は器厚は薄い。	外面　ナデ。 内面　ヘラ削り後ナデ。	胎土　精緻 焼成　良好 色調　明黄褐色
20	甕形土器	SX2	口径 [17.4] 胴部最大径 [20.2]	口縁部は「く」の字状に外反し、端部をやや肥厚させて丸く収める。口縁部から上方にかけて、器厚を薄くしあげる。胴部は長円を呈し、底部にかけて器厚を薄く仕上げる。	外面　口端部ナデ、口縁部、頸部、胴部、ハケ目後ナデ。 内面　口縁部ナデ、頸部、胴部ヘラ削り後ナデ。	胎土　0.5～3mm の砂粒含む 焼成　良好 色調　浅黄橙色～黄橙色
21	甕形土器	SX2	口径 [13.4] 胴部最大径 [14.7]	口縁部は「く」の字状に外反し、端部は丸く収める。胴部は内湾しながら立ち上がる。	外面　口縁部ナデ、以下ハケ目後ナデ。 内面　口縁部ナデ、以下ヘラ削り後ナデ。	胎土　1～2mm 大の砂粒含む 焼成　良好 色調　黄橙色～浅黄橙色
22	甕形土器	SX2	口径 12.6 胴部最大径 13.0	口縁部は「く」の字状に外反し、端部は外側に肥厚し、平らに収める。	外面　口縁部ナデ、頸部、胴部ハケ目。 内面　口縁部ナデ、頸部オサエ、指頭圧痕、ヘラ削り。	胎土　1mm 大の砂粒若干含む 焼成　やや軟調 色調　明黄褐色～赤褐色 外面スス付着
23	甕形土器	SX2	口径 [13.0] 胴部最大径 [16.3]	口縁部はゆるやかに外反し、端部は平らに収める。胴部は内湾しつつ立ち上がる。器厚は全体的に均等である。	外面　口縁部ナデ、頸部、胴部ハケ目。 内面　口縁部ナデ、胴部ヘラ削り。	胎土　0.5～2mm 大の砂粒含む 焼成　良好 色調　橙～黄橙色

番号	器種	出土位置	寸法 (cm)	器形	調整・成形	備考
24	壷形土器	SX2		口縁部は外湾する端部に拡張部を造りだした複合口縁である。	外面　口縁部ナデ、拡張部にヘラ状工具弧文を施す。 内面　ナデ、口縁拡張部接合部分上方に指頭圧痕が残る。	胎土　0.5 ～ 1mm 大の砂粒含む 焼成　良好 色調　淡黄色
25	高坏 (脚)	SX2	底径 [14.3]	内湾気味に下方にむけて延びる脚部が屈曲点以下、「ハ」の字状に広がり脚端部を丸く収める。	外面　口縁部ナデ、拡張部にハケ目、脚端部ナデ。 内面　ハケ目後ナデ。	胎土　3mm 大の砂粒含む 焼成　良好 色調　浅黄橙色
26	壷形土器	SX2		外湾する口縁端部に、さらに外反する拡張部を接合した複合口縁。端部は尖り気味におさめる。	外面　ナデ。 内面　ナデ。	胎土　0.5 ～ 2mm 大の砂粒含む 焼成　良好 色調　明黄橙色
27	高坏 (脚)	SX2	底径 12.9	脚部は直線的に開きながら下方に伸び、下位 1/3 の部分で屈曲し、さらに外反しながら延びる。脚端部は尖り気味に丸く収める。	外面　ナデ。 内面　ナデ、頸部ヘラ削り。	胎土　0.5 ～ 1mm 大の砂粒を含む 焼成　良好 色調　橙～黄橙色
28	壷形土器	SX2	口径 [11.4]	口縁部は「L」の字状に直立気味に上方に延び、端部はやや内傾し丸く収める。頸部は肥厚しているが、胴部にかけて器厚を減じる。	外面　口縁部ナデ。頸部、胴部ハケ目。 内面　ナデ。	胎土　精緻 焼成　良好 色調　明黄褐色　　内面外面とも一部に黒斑あり
29	壷形土器	ST1	口径 [13.3] 胴部最大径 [20.6]	口縁部は「く」の字状に外反し、端部は丸く収める。胴部は球形を呈し、底部は丸底である。	外面　ナデ。 内面　ヘラ削り後ナデ。	胎土　0.5 ～ 3mm 大の砂粒を含む 焼成　良好 色調　にぶい橙色
30	甕形土器	SX3	口径 [18.0] 胴部最大径 [26.8] 底径 [4.0] 器高 33.8	口縁部は「く」の字状に外反し、端部は丸く収める。頸部は肥厚している。胴部は倒卵形を呈し、底部は平底である。	外面　口縁部ナデ、胴部ハケ目後ナデ。 内面　口縁部ナデ、胴部ヘラ削り後ナデ。	胎土　精緻 焼成　良好 色調　明黄褐色、一部橙色
31	壷形土器	SK6		口縁部は頸部から肥厚しつつ緩やかに外湾し、端部は上方につまみ出しながら平らに収める。胴部は内湾しながら立ち上がる。	外面　口縁部ナデ、頸部以下ヘラ削り後ナデ。 内面　口縁部、頸部ナデ、胴部ヘラ削り。	胎土　1 ～ 2mm 大の石英粒含む 焼成　やや軟調 色調　明黄褐色

鉄器観察表

番号	器種	出土位置	計測数値（cm，g）				備考
			長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	
32	鉈	SH1 埋土中	2.6 刃部 1.9	1.3	0.2	1.8	
33	刀子	SH3 埋土中	4.7 刃部 2.5	刃部 1.2 茎部 0.8	刃部 0.2 茎部 0.5	15	
34	鏃	ST1	5.1 刃部 2.8	刃部 1.2 茎部 0.8	刃部 0.3 茎部 2.5	4	柳葉形・有形・凸基

Ⅳ　まとめ

当遺跡では調査の結果、竪穴式住居４件、テラス状遺構３件、土坑６基、土壙墓３基を確認した。これらの時期と性格、また瀬野川流域における歴史的な位置付けについて若干の考察を行いたい。

１．集落の時期と変遷について

まず、各遺構から出土した土器から、それぞれの遺構の時期を眺めてみる。土器編年は「『広島湾岸における弥生時代後期土器等に関する一考察』（財）広島市文化財団文化財課研究連絡誌Ⅰ 2003 年」による。[注1]

（Ⅱ－２－③）
SK1、SK5、SH4、SX1
（Ⅱ－3）
SH1、SH2、SH4、SX2 の南半部、SX3、SK2
（Ⅲ－ 1）
SH3、SX2 全体
（Ⅲ－２）
ST1 ～３

段之原山遺跡の遺構の位置関係と出土した土器等を考えると、当遺跡を主に構成するのは、SH1 と SH2 の住居であり、この２つの住居が主に使われたと考えられる。その時期には、SH1、SH2、SH4、SX1、SX2、SK1、SK2、SK5、SX3 と、尾根上のほとんどの遺構が作られており、遺物から見ても、この時期が当遺跡の最盛期であると考えられる。

SH1 と SH2 の２つの住居をみると、住居のプラン・規模等は、両住居が隅丸方形の床面プランをもち、一辺が６m程度の規模で、柱穴の配置状況も似ており、ほぼ同規格である。時期の点でも、使用開始時期に若干の差は考えられるとしてもそれぞれ、Ⅱ－２－③期に使用開始が予想され、Ⅱ－３期には使用が終わっているという点で共通している。また、それぞれの住居に隣接する土坑（SK1・SK2）の大きさ、底面形状などの規模は同じものである。さらに、位置関係、使用時期等から、住居とのつながりが考えられる SX1、SX2 は、その規模、住居からの距離、また焼土を多く検出したことから、火を連続的に使ったと思われる用途も似ている。

このような状態から、ムラの最盛期であったⅡ－３期に、2 組の住居―土坑―テラス状遺構のセット関係があり機能していたと想定することができよう。

さらに、Ⅱ－３の最盛期の前後を考えてみたい。SH1 の住居は、３軒分の建て替えが見られ、最初のものは、Ⅱ－２－③期の使用開始で一辺が約 460cm 規模のものが想定される。また、SH4a からはⅡ－２－③期の土器が出土しており、築造はそれよりさかのぼる時期となるであろう。以上のことから、これら２軒の住居は当遺跡最古のものと考えられ、規模の点でも最小の住居と

考えられる。その意味では、これらの住居は、当遺跡に最初に住んだ人々が、とりあえず造った住居であった可能性が考えられよう。

そして、Ⅱ－３期の後、Ⅲ－１～２期に、SH3、ST1～３を最後に、ムラの形跡がなくなっていく。つまり古墳時代が始まり、しばらくたった時期に、この集落は尾根から消えていくのである。

当遺跡の遺構の変遷を概観すれば、以下のような特徴があげられる。すなわち、当初から２家族によって居住が開始され、同規模、同形態の住居を同時に築造し、それぞれ同様の土坑、テラス状遺構を備えるなど、かなり意図的に「住居―土坑―テラス状遺構」の同一の生活様式を守ろうとしたように考えられ、「画一的な不自然さ」を感じさせる。ここまで、遺構の構成が画一的な集落は、太田川流域、八幡川・石内川流域、また賀茂台地を見ても例がなく、本遺跡の特徴であるともいえよう。

いずれにしろ、この「画一的な不自然さ」は、当遺跡がある意図をもって計画的に造成されたことを意味しているといっても過言ではあるまい。

2. さいごに

遺跡の位置環境等を検証することにより、当遺跡の意味について考えてみたい。瀬野川流域の遺跡は、流域沿いの小河川の可耕地を中心に遺跡が営まれている。最も広い平地を持つ中野地区は、大集落である三谷遺跡[注2]をはじめ、弥生時代中期終末から古墳時代にかけて多くの遺跡が立地している。畑賀地区も数は少ないが、弥生時代後期～古墳時代の遺跡が存在する。下瀬野地区は弥生時代後期中ごろの遺跡が２ヶ所確認されているのみである。その中で、上瀬野地区をみると、これまで発掘調査は行われておらず、弥生時代の遺跡の存在は知られていなかった。しかし古墳が存在しており、熊野川が瀬野川に合流する地域で、農耕は可能だったと想定されることから、弥生時代の遺跡の発見が待たれる地域であったのである。そして、平成15年に広島県教育委員会によって実施された発掘調査の結果、古墳時代の初頭から前期にかけての大規模集落である塔之原遺跡が存在していたことが明確になった[注3]。

その中で、今回調査を実施した段之原山遺跡は、遺跡の最終段階が若干重複する部分はあるが、この塔之原遺跡に先行する遺跡であり、現段階では上瀬野地区で最古の遺跡ということとなろう。

また当遺跡の性格について、いくつかの条件をあげて考えることができよう。この遺跡は①尾根上の平坦面は狭小であり、住居、テラス状遺構の平坦面を造成するために、遺跡の北側では２m以上も斜面を掘り込む必要があったこと、②日照時間が短く住環境がとり立ててよいとはいえないこと、③「画一的な不自然さ」は当遺跡がある意図をもって計画的に造成されたと考えられること、④熊野川と瀬野川の合流地域で可耕地であったこと、⑤上瀬野地区が昔からの交通の要衝であり、比高が約50mの本遺跡から瀬野川流域・熊野川流域のようすが見渡せること、⑥短期間にその役目を終えたと考えられること、などが条件としてあげられる。

以上のようなことから、段之原山遺跡の造成の意味を推測するなら、当遺跡はこの地域を開発する際に最初に営まれた集落であり、開発地域を眼下に置くことを優先して立地の選定がなされ、開

発が軌道に乗った段階でその役割を終えたのではなかろうか。その場合、時期的にみて、隣接する塔之原遺跡と連続しており、塔之原遺跡が当遺跡の住人の移転先である可能性も高いと言えよう。

いずれにしても、瀬野川流域の集落の本格的な発掘調査はまだ類例が少なく、広島市域と多少の様相の違いはあるとしても、それを瀬野川流域の集落の特徴に結びつけるのはむずかしい。今後の調査成果の蓄積により、本遺跡の性格が明らかになり、広島市から東広島市に至る地域の様子が解明されることを期待したい。

注）

(1) 財団法人広島市文化財団「研究連絡誌Ⅰ『広島湾岸における弥生時代後期土器等に関する一考察』若島一則」2003 年

(2) 財団法人広島市文化財団『三谷遺跡』2006 年

(3) 財団法人広島県教育事業団『平成 16 年度ひろしまの遺跡を語る』2004 年

図版

a　段之原山遺跡遠景（航空写真・調査前・西から）

b　段之原山遺跡遠景（航空写真・調査後・西から）

図版 2

a　段之原山遺跡遠景（航空写真・調査前・北から）

b　段之原山遺跡遠景（航空写真・調査後・北から）

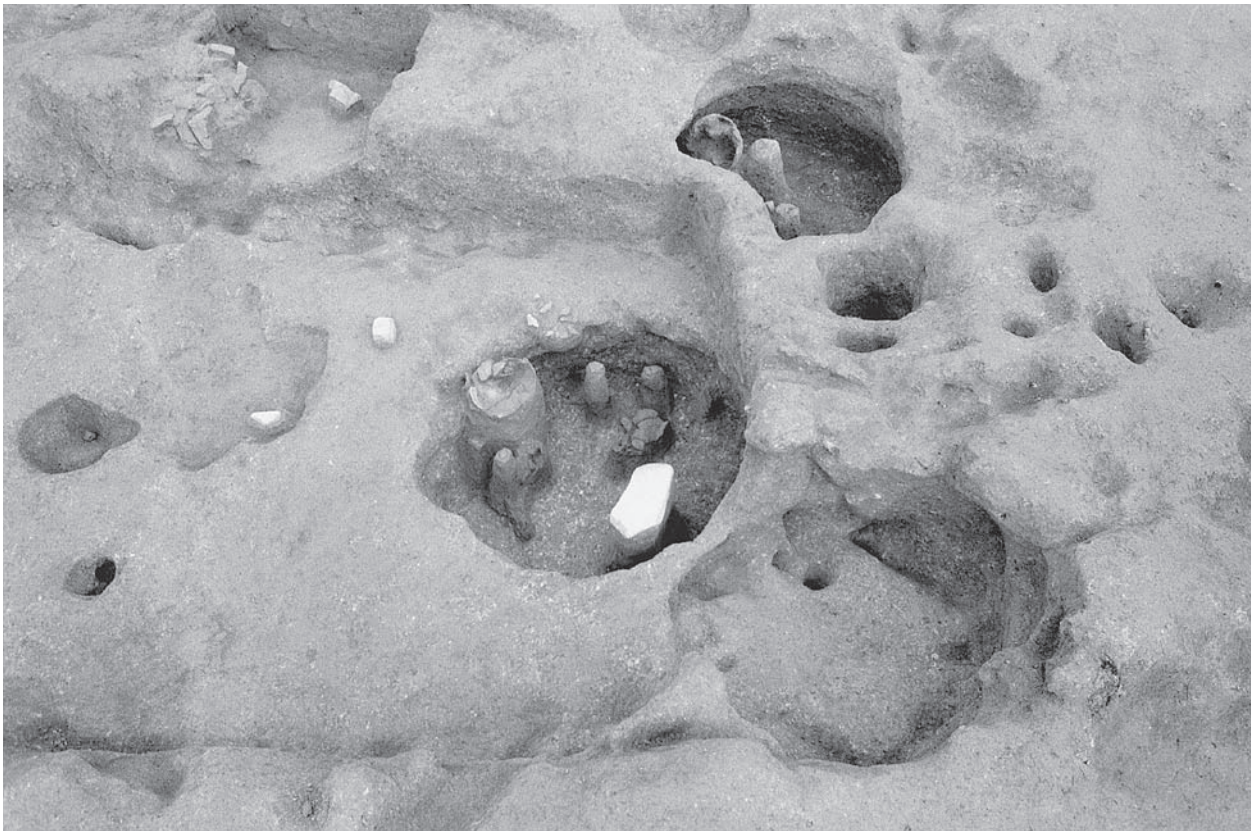
a　SH1・SK1（北から）

b　SH1b　土器出土状況

図版 4

a　SH2・SK2（北から）

b　SH3（西から）



a　SK3・4・5（西から）

b　SH4（北から）

図版 6

a　SX1（南東から）

b　SX2（東から）

a　SX2　土器 19・20 出土状況（西から）

b　ST1・2・3（北から）

図版 8

a　SX3（南から）

b　SK6（東から）

出土遺物（1）

図版 10

出土遺物（2）

出土遺物（3）

図版 12

出土遺物（4）

報告書抄録

ふりがな	だんのはらやまいせき　―ひろしまし　あきく　かみせのちょう　しょざい―
書　　名	段之原山遺跡　　―広島市安芸区上瀬野町所在―
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	財団法人広島市文化財団発掘調査報告書
シリーズ番号	第 14 集
編著者名	若島　一則　　松原　啓　　小林　奈緒美
編集機関	財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課
所 在 地	〒 732-0052　広島県広島市東区光町二丁目 15 番 36 号
発行年月日	西暦 2006 年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
だんのはらやまいせき 段之原山遺跡	ひろしまけんひろしま 広島県広島 しあきくかみ 市安芸区上 せのちょうあざ 瀬野町字 だんのはらやま 段之原山 335 外	34107	―	34° 25′ 05″	132° 37′ 24″	20040705 ～ 20041130	1000 ㎡	一般国道 2 号 (東広島バイパス) 建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特　記　事　項
段之原山遺跡	集落跡	弥生時代	住居跡　　4 基 テラス状遺構 3 か所 土坑　　6 基 墳墓　　3 基	弥生土器 鉄器	弥生時代後期から古墳時代まで営まれた集落及び墳墓群

（財）広島市文化財団発掘調査報告書　第 14 集

段　之　原　山　遺　跡

－安芸区上瀬野町所在－

2006 年 3 月

編集発行　財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課
〒 732-0052　広島市東区光町二丁目 15 番 36 号
TEL　082-568-6511
印　　刷　大村印刷株式会社
〒 730-0847　広島市中区舟入南一丁目 10-10
TEL　082-503-1221